

石垣原合戦記 九州の関ヶ原、石垣原合戦を題材とした軍記・伝記史料(下)

守友, 隆
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://doi.org/10.15017/4493118>

出版情報：比較社会文化研究. 27, pp.1-16, 2010-02-20. 九州大学大学院比較社会文化研究科
バージョン：
権利関係：

石垣原合戦記

九州の関ヶ原、石垣原合戦を題材とした軍記・伝記史料(下)

守友 隆
モリトモ タカシ

【解題 下】

本稿(上)では豊後国石垣原での黒田如水と大友義統との合戦部分を翻刻・紹介したが、(下)では大友義統の降伏「大友義統降参并加藤主計頭清正使者之事」から九州での黒田勢の戦い、また美濃国関ヶ原において本戦に参加した如水の嫡子長政の動き、黒田家が筑前入国、如水死去「怒水公鹿ヶ谷御逗留并筑前入部之事」までを翻刻・紹介する。なお、(下)の部分の内容の特性にてらして、本解題では、翻刻史料に傍線①～⑩を付し、順に検討していくかたちで進めることにする。

①は作者(黒田家に縁のある人物、具体的にいえば福岡藩士^カ)の大友義統評である。「まことに忠臣の勇士(吉弘嘉兵衛統幸・宗像掃部鎮統など)を用ひたならば運を開かずともその名が後代まで残るといふのは、愚将(大友義統)の心底こそ本当に浅ましいものだ。」と酷評している。しかし、これが同時代の人々の義統評か、という疑問が残る。大友義統は、元は城であった立石の要害に籠もっており、黒田側としても無用の犠牲者を出したくないため降伏を勧めたのであろう。それを義統は受け入れた。それだけのことで酷評されるのが一般的であるとは考えられない。やはり、黒田に敵対した代表として貶められたに過ぎないと考えるのが妥当であろう。

②は作者の加藤清正評である。「誠に清正も日和見とそ見へにけり」とあるが、これは石垣原合戦に病で参戦しなかった加藤清正は黒田・大友の何れか勝者のほうに負担するつもりであった、とする見解である。これに関する根拠は全く見出し得ないであろうか。加藤清正は関ヶ原の発端となった上杉征伐に従軍しておらず、日和見とまでは言えないが、積極的な東軍(徳川方)参加でなかったことは明らかである。西軍方である小西行

長の居城宇土城を攻撃したのは関ヶ原合戦後の九月二十一日であり、与力の田原紹忍・宗像掃部が西軍方の旧主大友義統勢に加わったことにより西軍方と疑われた岡城主中川秀成が、関ヶ原合戦後、西軍方である太田氏の臼杵城を攻撃したのと同じ姿勢だからである。慶長五年関ヶ原前後の加藤清正について検討した先行研究は管見の限り見当たらない。しかし、「軍記物」であっても正史、一次史料以上に歴史的事実を後世の我々に伝えてくれる可能性があることをこの一例は示しているのではなからうか。

③は島津氏の一団が大坂から海路鹿児島に向かう場面である。島津氏の船団は周防国上関(現山口県上関町)の沖合でばらばらになり、御台所(義弘夫人)の乗った船二艘が安岐城を包囲していた黒田如水の水軍に誤って接近し、二艘の船は攻め立てられ炎上、女性達は入水し、男達は討ち死にするという、「源平合戦における壇ノ浦の平家一門」を髣髴とさせる場面である。しかし、島津家の史料「旧記雑録」などから島津氏の船団が黒田水軍の攻撃をうけたことは確認できるが、御台所自身は義弘の船に同乗しており難をのがれている。また、伊集院左京を始めとする武者達は悉く討ち死にしたが、女性達(義弘夫人の侍女達)は捕虜となり、のち講和がまとまった後薩摩に送り返されている。④は豊前小倉城主毛利尙岐守勝信についてである。彼は「常日頃から家来をあしざまにし、短気な武将であったので、家来も彼を非常に憎んでいた」とある。これは「豊後陳聞書」にも記されている。しかも、同書においては、一門家老が「このような時のために常日頃から諫言をしてきた。今は後悔しても仕方がない。(尙岐守が)是迄蓄えてきた金銀米銭を取り出し、各方面の堀・櫓の挟間に一俵・一箱置けば御用に立ちましよう」と皮肉を言っている。この逸話に似たものがある。それは「川角太閤記」に記されている、天正十二年(一五八四)九月越中国の佐々成政が、前田利家の部将奥村永福の守る

能登国末森城を攻撃し、利家が末森城救援のため出陣する直前、利家の正室芳春院(まつ)が日頃から家臣を召し抱えず金銀を貯える利家をなじった逸話である。出陣に先立ち、利家に対して金の皮袋を投げつけ、「金銀をお持ちになって、槍をお突きになるのがよろしいでしょう。」と言いつつ放った。これには利家も激怒し差していた大脇差を抜こうとしたが、周囲の者達が押しとどめ、城門まで送り出したというものである。しかし、④の毛利老岐守勝信の悪評とはうってかわって、⑤の筑後柳川城主立花宗茂の評価は極めて高い。「立花は古今勇士」¹²、「立花氏は大閼厚恩の将なれ者、義に依て籠城なるへし」とある。この違いはその家が関ヶ原以後も存続したか否かによるのであろうか。

⑥は如水の人望を示すエピソードである。久留米城主小早川秀包は上方に赴く前に、留守城の守将桂民部に黒田如水が攻め来れば城を明け渡して退去するよう命じていた。如水がいかにか秀包から信頼されていたかが分かる。

⑦では、黒田如水らの島津攻めの軍勢が肥後国水俣に到ったところで、上方にいる家康から使者が来て、島津との和睦が成立したので薩摩に攻め入ってはならないとの旨を伝えたため、如水・清正はそれぞれ自領に帰国する。この停戦命令の位置づけ・意義を論じた研究は管見の限り見当たらないが、これは九州における徳川幕藩体制成立に関わる重要な歴史段階ではなからうか。

⑧には黒田長政の関ヶ原における働きにより家康率いる東軍が勝利し「天下太平」となった、と記されている。これは極めて妥当な評価であろう。⑨は家康が長政に「御感状」を与え、その「御感状」には吉川広家の働きも記されているので吉川家が黒田家に「御感状」を乞うて貰い請け家の貴宝とした、とある。家康から「長政江御感状」とあるが、『黒田家文書 第一巻 本編』¹⁷二一九号文書「徳川家康感状」の注解には、「家康と長政の関係において感状を授受する立場でない」とある。またその他の理由から同文書は偽文書とする。現存する「徳川家康感状」が偽文書であるかはともかく、この史料においては家康が黒田長政に「御感状」を与えたとするのは違和感はない。なぜならば、関ヶ原段階では家康と長政の関係において感状を授受する立場になくとも、この史料が成立した時期は徳川家と黒田家の関係は感状を授受する間柄となっていたからである。また、この部分の記述は現存する『黒田家文書』所収の「徳川家康感状」は偽文書であることを傍証する。つまり、黒田家は吉川家に「御感状」を譲ったため同家には残っていないとあるからだ。もともと与えられていないものだから残っていないのは当然である。それゆえに吉川家に譲渡したとすれば辻褃が合う。

⑩はよく知られている「島津の退き口」である。島津豊久は殿軍をつとめ戦死するのだが、この史料では脚色がなされている。すなわち、安藤帯刀直次・成瀬隼人正成の討

ち死にである。彼らは関ヶ原合戦後に紀州家・尾州家の付家老となる人物である。また、二人とも駿府年寄として初期幕政の中枢に位置し、黒田長政と親交が深かった。そのため、成瀬隼人正成は長政が亡くなる前に長政の宿所報恩寺に見舞いに訪れており、長政は彼に嫡子忠之のことを頼んだため、正成はその子正虎にそのことを託し亡くなった。

黒田騒動が起った時、成瀬隼人正成虎・安藤帯刀直次は忠之のことを案じ、忠之が蟄居していた長谷寺を度々訪れた。このことから福岡藩黒田家にとっては恩人である兩人だが、この史料では島津豊久の引き立て役とされ、豊久に討ち取られたことになっているが全くの偽りである。福岡藩黒田家と馴染みが深く、作者が知っている徳川家臣であったため、二人が島津豊久の引き立て役に選ばれたと推測される。

⑪の島津の帰国は、史実では義久ではなく義弘であるが、兎に助けられたという不思議な話である。しかし、他の信頼できる一次史料などからそのような逸話を見出すことができず、立石定夫氏が述べられているように、同じ西軍に属した諸将の家臣や在地の者に道案内をさせて帰国したようである。

⑫の家康が長政の手をとって長政の功を賞したというのは、有名なエピソードである。これは黒田家の関ヶ原合戦における武功を示す一番の逸話であろう。

⑬は三成捕縛についてであるが、三成が自領の領民から代官所に居場所を通報され捕らえられるという、三成が浅はかな人物であるように記されている。一方、⑭は小西行长捕縛についてであるが、⑬の三成の場合とうってかわって行長は思慮分別のある人物として描かれている。

⑮は関ヶ原以後の如水の回顧談を記しているが、これが極めて興味深い。すなわち、「長政が謀に勝れているといっても関ヶ原合戦がすぐに終わってしまったことは残念なことだ。我が勢(九州の如水率いる黒田勢)を数えると二万余騎となっていた。九州平定目前なので、この軍勢で中国地方に攻め入り毛利家を降参させ、その後上洛してさらに大軍となれば、関東まで平定して天下の主にもなれたものを。残念なことだ。諸年人も戦がなくては働き場がなくて難儀するであろうに。」と言っている。これは非常に過激な一文である。場合によっては徳川家ではなく黒田家が天下を獲っていたというのだ。しかも、この逸話はこの史料だけでなく一次史料にも記されている。それは関ヶ原合戦後の十月四日付吉川広家宛黒田如水圓清書状である。上方美濃における合戦が当月十月までも続けば、黒田勢は中国地方に侵攻し、華々しく一合戦をしようと考えていたが、こども早く家康の勝利となり、残念である、と如水の心情が吐露されている。また、「故郷物語」・「常山紀談」²⁵にもこの逸話は載っている。ゆえにあながちフィクションではない。しかし問題なのは、この逸話の虚実よりもこの逸話を載せた作者の真意であろう。

真偽はともかく、徳川の治世となった時期に成立したと考えられる本史料に徳川に対して挑戦的な記事が載っていることをどのように理解すべきか。また、近世軍記に一般的に徳川への忠誠を強調するのではなく、如水の野心をはっきりと記していることは注目すべきであり、本史料の特色である。

⑮は秀吉の如水評である。「秀吉の天下を奪う者がいるとすれば、ちんぱ跛(黒田孝高(如水)のこと。天正六年(一五七八)荒木村重が織田信長に謀反を起こすと、村重の居城摂津国有岡城に説得に赴いたが、幽閉され片足が不自由になったため)以外にいない。恐ろしい知謀をもった者だ。」と。この逸話は「名将言行録」にも記されている。ここで秀吉が使っている跛とは必ずしも差別表現ではなく親しみも混じった表現であるかもしれない。しかし、これを秀吉の言とはいえ、はっきり記した作者の意識とはどのようなものだったのだろうか。本史料が黒田家賞賛ということが根底にあるにも拘わらず、いわば如水の、武人としては欠点である部分を赤裸々に記した作者の意図である。如水が有岡城で幽閉されたため片足が不自由になったことは当時も周知のことであつたらうが、そのことをはっきり記した史料は管見の限り見当たらない。このことから、如水を無味乾燥な聖人君主、万能な「神」のように描かず、「人」として描こうとする作者の意図が顕れている。

⑯は如水の上洛、上洛中のことを記した箇所である。如水の京都での宿所は「鹿ヶ谷」とあるが、「黒田家譜」には「京都東山しる谷の邊」とある。²⁸なぜ本史料の作者は如水の宿所をはっきりと「鹿ヶ谷」としたのであろうか。鹿ヶ谷といえ、想起されるのが安元三年(一一七七)六月の平家打倒を企てたいわゆる「鹿ヶ谷の陰謀」である。作者は⑮・⑯の部分にある如水の天下獲りの野望を強調するため「鹿ヶ谷」としたのではなからうか。また、本史料には「平家物語」・「源平盛衰記」などの源平合戦を題材とした軍記の影響が見受けられる。³⁰

⑰は作者の如水評である。軍功は数え切れないほどあり、日頃から柔和で家臣の諫言を聞き、悪を退け、忠臣を大切にされたため人は皆彼に心服した、とある。終わりの記述になって前半の喜怒哀楽を表す人間味溢れる「如水」から聖人君主の「如水」へと如水の人物像が変化しているように考えられる。一方、⑱は作者の長政評である。父如水の道を学び、忠臣を厚遇したため黒田の城下町福岡は繁盛したとある。

以上検討してきたことで本史料の記述に関して一貫しているのは、黒田家賞賛であるが、問題なのは本史料における作者の石垣原合戦の歴史的な位置づけと、如水の人物描写に見受けられるブレである。石垣原合戦も含む慶長五年の関ヶ原合戦が黒田家繁栄のもととなったことにブレはないが、如水の豊後国石垣原での局地戦を含む、九州平定を目

論んで豊後・豊前・筑前・筑後・肥後へと転戦した「石垣原合戦」が、徳川に天下をもたらしたという歴史的な位置づけと、反対に黒田家が天下を獲り得た可能性があつたとする位置づけとの間でブレがある。幕藩体制成立の前提となつた、「九州の関ヶ原」石垣原合戦といった局地戦も含む、広義の関ヶ原合戦に貢献した黒田家と如水・長政。一方で関ヶ原合戦は黒田家・黒田如水が天下を獲り得る機会であつたとする見方。後者を全面的に押し出していないのはやはり公儀(徳川幕府)を憚つてのことであろうが、後者を記していることが本史料の一番の特色であろう。黒田家は天下を獲り得る家であつた。黒田如水は天下人秀吉にも恐れられ、関ヶ原合戦の折には天下を獲る可能性もあつた。これが作者、この史料が一番主張したい点ではなからうか。江戸期に成立した「軍記」・「伝記」においてこのようなメッセージが込められたものは極めて珍しいのではなからうか。それゆえに本史料は他の「軍記」・「伝記」と比べても異彩を放っている。

本史料は、いわば実録的な「軍記」と講談的な「軍記」の何れであるかと言えば、後者である。多くのフィクションを含み、歴史学の研究ツールとして用いるよりは、文学・近世思想史の研究ツールとして用いるのが妥当であろう。しかし、講談的な「軍記」であつても②・⑦・⑮のように、従来の歴史的通説に関して再検討が必要であることを示唆してくれる箇所もあり、全く歴史学において用いることが無益・ナンセンスであるとは考えられない。十分な史料批判を加えることにより、歴史学においても資するところのある史料であろう。

本稿では「豊後国石垣原合戦記」³¹の本文研究のみに終始したが、今後の石垣原合戦に関する諸軍記研究の方向としては、成立過程、特性などの基礎研究を土台に比較検討することにより、近世軍記研究をより深化させることができると考える。

1 小和田哲男氏は、降参の作法について次のように述べられる。「戦いするとき、最期の一兵まで戦うこともあるが、敗色濃厚となつたところで降伏することもある。特に城攻めに多い。それは、最後の一兵まで戦うということになると、文字通り、死にもの狂いで戦うことになり、攻め手の側にも犠牲が出るのが予想されるからである。噓い(あつかい)といって、降伏をよびかけることがある。(…中略…)城主なり大将に何らかの形で責任を取らせるのがふつうだつた。具体例としてよくみられるのが、頭を丸める、つまり、剃髪することであつた。降参の作法といつてよい。」(小和田哲男『戦国の合戦』二〇〇八年、学習研究社。二〇六・二〇七頁)。

2 森山恒雄氏によると、加藤清正は「慶長」五年(一六〇〇)の関ヶ原の戦には九州における東軍の中心として活躍し、宇土小西・柳川立花氏を攻略した。(森山恒雄分担執筆「加藤清正」『国史大辞典』)。これは通説となつているが、宇土城落城は十月二十日のことであり(清正行状奇「統群書類従 第二十三輯上 合戦部」一九二四年、統群書類従完成会(四五頁など)、やはり

九州における東軍の中心とは言い難い。

3 元大友家臣であり当時秀成に仕えていた田原紹忍・宗像掃部が石垣原合戦に際して中川家の旗印を盗み出して大友軍に加わったため、如水から石田方との嫌疑をうけることとなった。そのため秀成はその嫌疑を晴らさんため石田方の臼杵城主太田飛騨守と戦い勝利を得た（著作者不明「西治録」（垣本言雄校訂）大分縣郷土史料集成 戦記編、一九七三年、臨川書店）七七六〜七八六頁）。

4 「源平盛衰記 下 巻第四十三」の「二位禪尼入海並平家亡虜の人々」には次のような記述がある。「二位殿は、兵共が御船に矢を進せ候へば、別の御舟へ行幸なし進せ候ふとて、今ぞしる御裳濯河の流には浪の下にも都ありとは」と宣ひもはてず、海に入り給ひければ、八條殿、同じくつゞきて入り給ひにけり、國母建禮門院を始め奉りて、先帝御乳母御典侍、大納言典侍已下の女房達、船の鱸舳に臥しまろび、聲を調べて呼び給ふも夥し、軍喚にぞ似たりける、浮きもや上らせ給ふと暫しは見奉りけれ共、二位殿も八條殿も深く沈みて、見え給はず」（『物語日本史大系 第九巻 源平盛衰記下・北條九代記』、一九二八年、早稲田大学出版部、二二二頁）。平家一門に付き従った女官達と言え、見目麗しく、その女官達は哀れにも入水するという絵が浮かぶが、「平家物語」・「源平盛衰記」などの原典にあたってみると、意外にもそのような光景が浮かぶ記述は見受けられない。

5 『鹿兒島県史料 旧記雑録後編三』（一九八三年、鹿兒島県）一一二〇号文書（五八八・五八九頁）

6 伊集院左京亮久朝（永祿二年（一五五九）〜慶長五年（一六〇〇））は豊後沖の海戦で討ち死にを遂げることが確認できるが（『鹿兒島県史料 旧記雑録拾遺諸氏系譜一』一九八九年、鹿兒島県。一九二頁）、その父久利（大永六年（一五二六）〜慶長十二年八月十五日）は大隅加治木で亡くなっている（同一一八八・一八九頁）。また、左京亮久朝には三人の男子がいたことが確認できるが、彼らはこの海戦で討ち死にしていない（同一一九二・一九三頁）。さらに、島津家中伊集院姓の人物でこの時期「藏人」を官途名とする人物は管見の限り見当たらない。よって父子が枕を並べて討ち死に、というのは作者が故意に創作したものと考えられる。久朝以外の伊集院姓で討ち死にした人物に半五郎忠次がいる（同三二六頁）。彼の父は若狭守忠次で（同三二二頁）、久朝とは近い血縁関係にはない。半五郎忠次の討ち死にが作者に父子の討ち死にという場面を想像させたのかも示れない。半五郎忠次は討ち死にを遂げたにも関わらず、慶長五年十月十日付伊集院半五郎宛島津惟新（義弘）知行宛行状が発給されている。その文面は「今度美濃國關ヶ原之合戦致粉骨、從其伊勢・近江・伊賀・大和・河内・和泉ニ至り歸國路次傳、方時茂不相離側抽奉公之段、神妙之至、尤感入候、仍知行石宛行者也、」とある。半五郎忠次の働きは、同人死後に与えられた感状からも分かるように抜群で広く知られていたのではなからうか。

7 註5前掲書一三〇三号文書（六二二頁）

8 山本博文「島津義弘の賭け」一九九七年、読売新聞社、二五七頁。

9 「豊後陳聞書」、別名「黒田如水石垣原軍記」（註3前掲書「大分縣郷土史料集成 戦記篇」二四四・二四五頁）には次のように記されている。「小倉ニハ壹岐守カ一族家臣寄合テ、軍ノ評定有ケル所ニ、既ニ九左衛門ハ降敵テ、香春ノ城ヲ明渡、アマツサハ敵方先陣ヲ承リ、小倉ハ馳向ナト聞

ヘケレハ、頼木ノ下ニ雨ノタマラヌ心地シテ、軍ノ評儀モ成カタク、アキレ果タル所ニ、一門家老

申出ルハ、加様ノ時ノ御為ニコソ、日来諫言ヲハ申ツレ。今ハ悔テ無詮。所詮日來重寶アソハシ積貯ヘ給ル金銀米錢ヲ取出サセ給ヒ、諸方ノ持口塀矢倉ノ矢サマニ壹表一箱ヲ召置給ハ、今ノ御用ニハ立可申ヲト申テアサ笑ケレハ、壹岐守今ハ覺トヤ被思ケン。手ツカラ髪ヲ押切テ、小倉ノ湊ヨリ船ニ乗、夫ヨリ何地共ナク落行給フ。此壹岐守ト申ハ、常々武ノ道ニ心懸疎ク、仁義ニクラキ大將ノ、欲心深キ人ナルニヨリ、日來無故米錢ヲ貯ヘ、藏庫ニツミ置計ヲ業トシテ、無慈悲第一ニ賞罰明ナラス。侍足輕共ニ疎、民人悉ク困窮シケレハ、城中ニ籠兵少ク、何レニ人数ノ手當スヘキ様モナク、下知聞人モナカリケレハ、一族老臣ノ者共、覺ハ申ケルト也。去程ニ如水公ノ御先手、小倉ノ後安達山ニ取上リ、小倉ヲ目ノ下ニ見ヲロシテ陣ヲ取。サレトモ小倉ニハ可防人モ不見。何トヤラン城ノ跡物サヒケレハ、人ヲ入テ見セケルニ、壹岐守ハ早落タリト見得テ、城ニハ一人モ候ハスト申。依之何ノ御手間モ不入、小倉ノ城ヲ御取、城番ヲ被入置。

10 「川角太閤記」は五巻からなり、豊臣秀吉の事跡を伝えた書で、川角三郎右衛門の著述といわれる（志村有弘「川角太閤記」一九九六年、勉誠社。一一頁）。また、桑田忠親氏によると、元和七年（一六二二）から同九年にかけて、秀吉に仕えた田中吉政の家臣川角三郎右衛門が著したとされる（桑田忠親分担執筆「川角太閤記」（『国史大辞典』））。

11 「大事の敵被差向候上ハ先人を御抱可被成事尤に候、儲世間も御國々しづまり候時ハ又金銀も不入物にてハ無御座候、其時分ハ能々國の始末をも被成金銀御貯被成候へと朝夕異見申候、此度此金銀を被召連、槍を御突せ候て可候とて、金の皮袋を又左衛門殿へ御打付被成候と相聞申候、又左衛門殿ハ出陣の門出を祝ハんとハ不思して、我身に腹を立さす事、則敵に候そとてかずかを引付、軍神に祝ハんとて被指たる大脇差を抜んとし玉ふ處を」（『近藤瓶城編「改定史籍集覧 新加通記類」一九〇一年、近藤活版所。一三〇・一三二頁）。『豊後陳聞書』における毛利老岐守勝信の逸話は「川角太閤記」のオマージュであると推測される。

12 毛利老岐守勝信の子、毛利勝永は大坂夏の陣で戦死し、毛利老岐守勝信の家は絶えたが（永尾正剛分担執筆「毛利勝信」（『福岡県百科事典 下巻』一九八二年、西日本新聞社。九五九頁）、同じく、本史料で悪し様に言われている大友家は義統（吉統）の嫡男義乗が徳川家の旗本として存続し、義乗の家督を継いだ義親は嗣子なくして亡くなったが、義統の次男で義乗の弟にあたり、松野姓を名乗っていた正照の子、義孝が召し出されて高家に列し、義親の義珍、義方、義智、義路、義敬、というように幕末まで高家として存続した（『寛政譜 第二』三八五〜三八八頁。小川恭一編『寛政譜以降 旗本家百科事典』第一巻、一九九七年、東洋書林。五七一・五七二頁）。

13 「初め秀包行くに臨み、守将桂民部に告げて曰く、是役なり、大坂利あらざれば則ち、鄰國此城を攻めんこと必なり、汝力を竭くし、兵を勵まし之を防ぐべし、支うべからざるに至りては、則ち先づ吾妻子を殺し、城と共に亡ぶべきなり、若し或いは黒田如水來らば、則ち城を付して去れ、我嘗て謀ること有り、民部曰く諾と、但し是役に従わざるを恨むのみ、及乎鍋島直茂柳川の城を攻め、兵此城に薄し、先づ入らんと欲す、秀包の婦人は大友義鎮の女なり、敵の手に辱めらることを懼るなり、四子を刺して自殺せんと欲す、民部人を使わして之を止め曰く、死ぬるに未だ晩からざるなり、時至り之を告ぐ、過ぎること勿れ、既に如水の弟圖書、清正の臣和田備中、各命を奉じ至る、

民部曰く固より秀包の命なりと、夫人及び四子を奉じ、士卒數百人を従へ、即日城を出て去る(道を田代に取り筑前博多に至る、卒に州に赴く、其後圖書秀包の女を養い子となす、吉田老岐に妻す、後長光院と号す)、是において圖書本城に居す(福岡県立図書館所蔵宝永五年(一七〇八)成立、「久留米城記」(資料番号 K二三〇/Sk))。

14 十一月十二日付、徳川家康書状(黒田家文書 第一巻 本編一五号文書)。「度々注進之旨、得其意候、柳河儀、質物請取、立花召連、至薩摩表、加主斗・鍋嶋加賀守相談被相働之由、及寒氣候之間、先年内者其元被在付候様、尤候、猶井伊兵部少輔可申候、恐々謹言」とあり、寒さの厳しい時節となったので年内は国許にいろのがよい、との趣旨である。また、同日付井伊直政の副状(同三四号)には島津に関して、「一、柳川之儀、質物被請取、立花被召連、加主斗頭殿・鍋嶋加賀守殿被仰談、至于薩廣表、御發向之由申聞候、年内者及寒天候之間、先其許御有付候様、御尤候間、御行之儀可有御延引候歟、一、万一嶋津指搦候於仕合者、来春即成敗可被申付候事、一、嶋津懇望之筋目も候間、其許可被成御聞合事」とある。すなわち軍事行動は延期し、もし島津との交渉が決裂した場合は来春侵攻を命ずるとある。

15 二木謙一「関ヶ原合戦の戦後処理」(小和田哲男編「関ヶ原合戦のすべて」一九八四年、新人物往来社。一〇九頁)には次のようである。「十二月に入ると、西軍の掃蕩戦はほとんど終わっていた。あとは島津を残すのみであった。この島津攻めには、西軍の総帥毛利輝元に命じて罪の償いをさせようという意見もあった。が、実行に移されぬまま、寒氣を迎えるとともに、家康は島津攻めの中を命じたのである。なお、家康の対島津問題に終止符が打たれるのは、関ヶ原合戦から約一年半後のことである。」と。また、山本博文氏は「福島正則ら豊臣系大名は、島津氏攻撃を好ましく思っていない。これは、島津忠恒の上洛後、かれにみせた厚意からもわかる。かれらが家康に味方したのは、ひとえに石田三成への敵愾心のためであり、その目的をはたした以上、いたずらに戦争をするのは家康の権力を拡大させる効果しかもたないと考えていたであろう。」(註8山本前掲書二七五頁)と述べられている。しかし、徳川家康の島津氏処置については黒田如水の薩摩進攻計画を踏まえないければ本質は見えないと考える。

16 黒田長政の軍功は以下の通りである。①福島正則にその居城清洲城を家康の宿陣として明け渡すようにとの説得役を引き受けて成功している。②合渡川の合戦で大軍を相手に先陣をつとめるなどの活躍。③小早川秀秋に使者を遣わし、「反忠」の論理で東軍に味方するよう説得、さらに西軍の毛利輝元の一族である吉川広家を、父如水の時代からの懇意により味方に引き入れたこと。④九月十五日の本戦において、長政自身による西軍統帥石田三成の本陣への攻撃成功。以上四点が挙げられる(福岡県史 通史編 福岡藩(一)二〇〇〇年、西日本文化協会。一六六・一六七頁)。

17 一九九九年、福岡市博物館。四七三、四七六頁。

18 慶長二十年(一六一五)閏六月二日付、黒田忠長(忠之)付の家臣栗山備後など三名に宛てた「覚」において、幕府要人との付き合いにおいて、本多佐渡守正信・本多上野介正純・安藤対馬守重信・長谷川左兵衛藤広・板倉伊賀守勝重・水野監物忠元以外には懇ろに申し入れをしてはならない、という一文(二条目)がある。その付けたりにいて、安藤帯刀直次・成瀬隼人正正成の名前がわざわざ記され、両名は特別であるとされている。このことからいかに彼らが長政から頼りにされて

いたかが分かる(「黒田家文書 第二巻」二〇〇二年、福岡市博物館。八六・八七頁・五七号文書)。

19 「新訂黒田家譜 第二巻」一九八二年、文献出版。一七・一八頁。

20 立石定夫氏によると、島津勢の撤退路は以下の通りである。関が原小池村の陣から烏頭坂、上野を抜け、牧田から伊勢街道に沿って西北の方向に転じた。右手には南宮山があり、このあたりで義弘一行は長束正家の物見隊に会い、同隊は地理に明るい士を派して義弘一行を嚮導した。それから今須川を渡り、和田部落に到り、和田から一之瀬東、さらに多良峽から急峻な峠道である勝地峠を越える。峠を降り下多良、多良に出で、落伍者の到着を待たため瑠璃光寺に立ち寄った。ここで義弘は島津豊久・長寿院盛淳戦死の報を聞き哭泣した。瑠璃光寺を発った一行は山の中を延坂へ、さらに下山を経て街道を西に外れ、幅二メートルの路をたどって一キロ、時山橋をわたり、時山部落を越えて、藪谷橋を過ぎ、鈴鹿山系に到った。それ以前、多良あたりで織田秀信の元旗本小林新六郎正祐という士が義弘一行に遭遇し、案内を買って出た。織田秀信は西軍に属し、関ヶ原本戦前の八月二十三日、居城岐阜城を東軍諸將に攻められ、降伏開城の上、髪を下ろして僧形となり高野山に登った。秀信旧臣の小林新六郎は、在郷の甲賀者を雇い、島津勢を先導した。藪谷を過ぎ、五僧峠の頂上に着いた。それから脇ヶ畑村五僧から保月、杉、来栖を過ぎ、中山道宿場、高宮近くの犬上川原に入った。関ヶ原合戦の翌日の十六日晩に義弘一行は同所を出発し、高宮から中山道を経て南下し、水口に到った。それから十六日夜、信楽を発ち、路々で嚮導を雇い、大和を経て、十七日夜河内平野に出た。平野河内にて義弘は、堺の町人田辺屋道与に使を派した。道与は自ら平野まで義弘を迎えに出で、摂津住吉の道与の家で義弘はじめて戦塵の汗と埃をぬぐい、安眠することができた。九月十八日のことであった(立石定夫「関ヶ原島津血戦記」一九八四年、新人物往来社。四八〜一〇二頁)。

21 「長政惣大将の御見参に入給ひければ、家康公長政の傍へ寄給ひて、今日の合戦勝利を得し事、偏に貴方かねての計策故なり。其上今にはしめざる事ながら、今日の軍に手を砕き忠節を励まされ、敵の張本石田を追崩され候事、手柄柄類なき事どもなり。此忠節報しがたし。代々黒田の家に對し疎略有まじき由仰られ、諸人の見る所にて、長政の手を御とりいたゞき給ふ。此度粉骨を盡し、力戦し諸大将多しといへども、長政のことく厚く其忠を感謝し給ふ事、かくのことくなるハ他に又類もなかりけり。」(新訂黒田家譜 第一巻)一九八三年、文献出版。三七四頁)。

22 今井林太郎「石田三成」(一九八八年、吉川弘文館)二〇九〜二一一頁に三成捕縛に関する諸説がまとめられている。その諸説において三成が騙されて捕縛されたというものはない。

23 「大日本古文書 家わけ第九 吉川家文書(一)」(一九二五年、東京帝国大学)一五四号(一二〇〜一二二頁)。その部分は次の通りである。「一、上方於美濃口御取相當月迄も御座候者、中國へ切上、花々と見知返し候而、一合戦可仕と存候ニ、はやく内府御勝手ニ罷成殘多候、」。

24 「如水聞きて、したゝか腹を立て、切甲斐守、若き者といひ乍らも、餘り智恵もなき事なり。天下分目の合戦、左様に抄やる物にてなきぞ。何としてなりとも永引かせ、牢人に口過をさせ、方々にて合戦あらば、敵味方共に、若し年たけたるは、老年の慰み、若きは、老いての方人になる事を仕らせ候様にこそ仕候こそ、人を引廻す者の役なれば、今の分にて、天下治まりたらば、牢人飢死すべし。其上牢人も、逐日重なるべし。さりとては物を知らぬ日本一の大たはけは、甲斐守なり。」

と、如水は関ヶ原合戦、西軍諸大名の処分が終わったことを聞いて、腹を立てて言ったという(『國史叢書 故郷物語』一九一六年、國史研究會。一七二・一七八頁)。また、如水の遺言として次のような逸話が記されている。如水が臨終の際に「我は無双の博打の上手なり。關ヶ原にて石田今しばらく支へたらば、筑紫より攻登り下部のいふ勝相撲に入て日本を掌の中に握んと思ひたりき。其時は子なる汝をもすて、一ばくちうたんとおもひしぞかし。」(『黒田如水遺言の事』(『常山紀談』一九二九年、博文館)三三七頁)と言ったという。

25 「内府を攻めし天下を取らんと思はんにはいと易き事なり。筑紫をば皆打平げたり。島津のみ残りしかあつかひを懸て味方とせん。若橋つかば攻破らん事尤易き所なり。中國備前播磨まで皆空國にて有しかば。我其頃二萬餘の軍兵をひきゐ。加藤鍋島は既に我に随従すれば。兩先陣として海陸二手に分ち。道すがら浪人どもをかり集んに十萬はあるべし。清正は猛將なり。吾旗本に有て攻のぼる程ならば。内府を討滅ん事掌の中に有と覺えたれども。われ年老ぬ。切從へし國を捨て京に上りしに。」と如水は山名禪高に語ったという(『黒田如水豪氣の事』註24前掲『常山紀談』三三五・三三六頁)。

26 山上登志美氏は、寛永十八年(一六四一)に書かれた、一柳家の発祥から書き始め関ヶ原合戦で最後をしめくつた家の記録、いわゆる「家記」である「一柳家記」(国立公文書館蔵)が描く関ヶ原合戦記事からは、先代から続く徳川への忠誠を積極的にアピールしようとする意図がうかがえる、と述べられている(山上登志美「関ヶ原関係「軍記」の研究」(『歴史読本 特集関ヶ原合戦全史』第四十九巻第十一号、二〇〇四年十一月、新人物往来社)一八九・一九〇頁)。また、「黒田長政記」(国立公文書館蔵)も「一柳家記」と同じく、関ヶ原での長政の忠勤ぶりを強調し、それ以外にも「豊後陣開書」や「豊後崩開書」といった黒田家に関する関ヶ原関係軍記も長政の父如水(孝高)の家康に対する忠誠を主題とした作品であると、評価される(同一九〇・一九一頁)。筆者も山上氏の評価に賛同する。

27 「秀吉、一日戯に近臣に向て、我死せば誰か我に代り天下を有つべきや、忌諱を憚らず、試に之言へと言はる。是に於て、人々見る所を言ふに、皆五大老の中なり。秀吉頭を掉て曰く、否、一人天下を得る者あり。汝等之を知らずやと。皆曰く知らずと。秀吉曰く、彼跛足之を得ん。皆曰く、彼の祿僅に十萬石なり。如何そ之を得ん。秀吉曰く、汝等末だ彼を知らず、故に疑ふなり。我嘗て高松を攻めし時、右府の訃音至る。依て夜を以て日に継ぎ、東上して以て明智を伐亡せり。爾後交戦大小数回あり。我大節に臨み、呼息閉塞し、謀慮百端、彼是決すること能はず。依て計を跛足に問ふに、立どころに裁断し、慮る所、軽忽粗糲なりと雖も、尽く我が練熟するものと符合せり。或は遙に意表に出るも数回あり。且つ其心剛健、能く人に任じ、宏度深遠、天下に比類なし。我在世と雖も、彼若し得んと欲せば、輒ち得べし。我彼を見るに、諸大名の陋劣なる者に親昵懇款し、敢て表飾を為さず。或は才智ある者に遇へば交を結び、鄙賤なりと雖も、礼儀を欠かず。機運を計り、時乱に乗じ、人をして粉骨努力せしむ。其半之を得るに及び、驀然覆倒し、之を得るもの、彼跛足の尤も長ずる所なりと。或人之を孝高に告ぐ。孝高竊に曰く、南無三宝、我家の禍なり。我痘頭臬の表あり。子孫の計を為すに若かずと。是に於て髪を削り、如水と号す。秀吉、当に怖ろしきものは徳川と、黒田なり。然れども、徳川は温和なる人なり、黒田の瘡天窓は、何にととも心を許し難き

ものなり、と言はれしとぞ」(岡谷繁実「定本 名将言行録 中」一九六七年、新人物往来社。一三三・一三四頁)。

28 川添昭三・福岡古文書を読む会校訂「新訂黒田家譜 第一巻」一九八三年、文献出版。四六二頁。
29 「鹿ヶ谷の陰謀」について「源平盛衰記 上 巻第三」の「鹿谷酒宴静憲御幸を止むる事」に記されている(註4前掲書五〇〜五二頁)。

30 拙稿「石垣原合戦記 九州の関ヶ原、石垣原合戦を題材とした軍記・伝記史料(上)」(『比較社会文化研究』第二六号、二〇〇九年、九州大学比較社会文化学府)三頁、およびその部分の註29にも「平家物語」から引用したと考えられる部分がある。

31 本稿タイトルは石垣原合戦記としているが、史料名としては巻頭の「豊後国石垣原合戦記」および「豊後国石垣原一乱記」、末尾の「石垣原一戦記」の三つがある。表紙には表題は記されておらず、この三つから選択しなければならぬが、筆者が最も適当だと考えるのは「豊後国石垣原合戦記」であり、本稿タイトルの頭に豊後国を付すべきであった。

【凡例】

(一) 見出し部分は太字にした。

(二) 史料中には適宜注を付し、必要な場合は補注番号を加え、史料末尾に列記した。

(三) 原文に読点(、)を加え、また並列点(・)を適宜挿入したほかは、文章体裁を含め原則として原文通りとした。ただし、行下りは字詰めのため原文とは異なる。

(四) 漢字の字体は原則として新字体を使用した。

(五) 原史料に用いられている古体・異体・略体などの文字は便宜上活字体に直した。

また変体仮名は江・而・者のほかは全て平仮名に改めた。

(六) 誤用の訂正や註釈のため右側に丸括弧を付し傍注を加えた。

(七) 墨抹で本来の文字が読めない場合は■記号、墨抹のあるなしにかかわらず本来の文字に訂正がある場合はその右側に訂正文字を付した。この場合、原文にある文字なので丸括弧は用いない。文字の解説ができない場合には□記号などで表現した。その際右側に想定される文字や注記(虫食いなど)などを丸字括弧内に適宜付した。

(八) 【解題】で分析対象とした箇所には傍線を付している。

【釈文】

大友義統降参并加藤主計頭清正使者之事

一、大友義統¹⁾、弥降参二出らるべき極りければ、早々毛利太兵衛²⁾か陣所江使者ヲ立、弥降人ニ出るべき間、貴公ヨリ如水公江宜敷御執成願入候由ヲ申来りければ、太兵衛殊の外喜悅して此次第實相寺山の本陣江御註進いたしけれハ、如水公不斜御喜悅まし³⁾、

早々太兵衛陣家迄降人ヲ出らるへしとそ申遣し給ふ、太兵衛早速右之旨立石江申遣しけれハ、日中者人目茂あり、夜に入てこそ降人に出へしとて返答ある、既に夜に入れ者、大友義統士卒追臣ヲ十人計召連、太兵衛か陣家江降人ニそ出られる、早速太兵衛ヨリ此趣ヲ如水公江註進ス、依之小林新兵衛ニ家人大勢差添られ早々大友主従ヲ生捕て中津川城江送り給ふそ哀なり、九州平均の後、大友ヲ京都江送遣し内府江渡し給へは、八丈か嶋江配流有て然る処に中国毛利家ヨリ大友加勢として数千騎を遣けれハ、もはや大友生捕れける故、空敷士卒ハ帰りける、誠に忠臣の勇士を用ひ給わハ運を開き給わすとも其名を後代に残されんに、愚將の心そ浅間敷けれ、中川修理太夫も石垣原江来りて如水公江使者を立、降人となりけれ者、肥後国熊本城主加藤主計頭清正家老兩人に人数を添て石垣原迄来りて實相寺山御本陣ニ来りて口上ヲ以テ申越ける者、清正も先頃以來病差シ起り打臥罷有候処、既ニ如水公御出馬の由承知致され、拙者ともを以テ御勢に差出し候処、最早大友も御生捕候上ハ、御祝義旁伺公仕由を申けれハ、如水公聞召、誠に御懇情忝存候、最早勝利を得候間、何れも御引取然るへきとて御念書ヲ送り遣し給ふ、誠に清正も日和見とそ見へにけり、熊・多賀牟礼の両城者敵かたなれハ、栗山四郎右衛門一備にて御知有ければ、畏り奉りて出立し早々扱を入て降参をこそなさせける、富来城垣見和泉守も上方ニ有りて討死しけれハ、留守居垣見利右衛門城代として有りけるも、如水公ヨリ扱を入給ふ、是又降人にこそ出にける、安岐城ハ熊谷内蔵之丞、上方江有之、留守居城なるに熊谷外記といへる者城代として籠城す、如水公大軍を以て城を取巻、数日かこみ給ふといへとも兵糧沢山にして落城し難し、船手にハ中津ヨリ数多の船を召寄せられ濱手にせいろふを上げ城責立けり、既ニ薩摩加護嶋の城主嶋津兵庫頭義久、今度上方ニ而石田治部少輔組シ、関ヶ原敗軍の将なれば、大坂ヨリ船数艘に取乗り、中にも御臺所をも舟に乗せ奉りて本國薩摩江志し、帆を上られしかとも、俄に大風吹けれハ、周防上ノ関ヨリ船四方ニ吹はなされ、夜に入りけれハ、御臺所の乗給ふ御船式艘に成りけれハ、いかハセましやと申ける処に、向に数多船のかかり火の見江ける故、定而味

方の船なるへしと夫を自當ニ而こきけるに夜の明けけれハ、味方の舟には無之て、安岐の城責の黒田如水公の舟にて有けれ者、御臺所の御傍に候ひける伊集院藏人・同左京などあわてふためき、いかハせんやと俄にこきのけんとする処に、如水公はるかに御覧して、あれ討取れと御下知有りければ、船手に招へし、諸士我もくと漕ぎきつらねて鉄炮すきまなく討掛て、味方は入替く、責立ければ、嶋津勢はわづか式艘に乗りし者ともなれハ、討る者多し、黒田か船より明松ニ火をかけ油を以てそ、きし品に火を付て、船にかけ入れしかハ、おしかわいてたまるへき、終に御船に火もへ付てほのさかんにもへ立けれハ、見めよき女性達数多船端に立出て入水をなしける中に打かけを着し給ふ

上ロウト姿ハ楊柳の風にしなゆる如く御口ひるは紅の如くさもやさかたにして梅花ヲつらねし如くの御かんはセはたへは雪の如くさもやさかたなる女性、西に向ひて手を合せ給ふと見江奉りしか是も諸ともに御入まし、けるそ哀也、伊集院父子も切腹して失けれハ、早速船を乗取、勝時をこそ上ケたりけるそ哀也、依之薩廣嶋津氏と黒田御家中不和となりけり、安岐城責遠責ニして隙取ければ、城中勞れたる躰にて見へにけり、如水ヨリ扱ひを入れ給ふ、此上ハ降参へしとて、熊谷外記切腹致しけれ者、不残城を明渡し降人ニこそなりにけり、如水公降参の者共を名付て先陣に加へ、城中に城代を召寄て國中ノ掟を出され、すでに豊後国中平均しけれ者、更に豊前小倉の城ヲ責落しぬらんとて其御勢を御覧しあるに七千人ニそなり給ふ、中津御出馬の時には、式千五百騎余なりしに、如水公の英勇をたつとひ我もくと随ひなひきける故に大運とこそ成り給ふ、勇々敷かりし御事なり、

柳川城責并如水公扱ひヲ入給ヲ事

一、如水公豊後国中平均しけれハ、国中を名附て後、御出立あり、豊前ニ帰り給ふ二も城中にハ入給わすして中津城下ヨリ一里程有ル処に一宿し給ひ家臣をも宿所江帰し給わす、是、則武士の心を乱さるゝ為なるへし、夫ヨリ同國小倉の端城香山嶽ノ城に押行給ふに、城代如水公の武意ヲ恐れ、早々城を明渡し降人にかこ出けれ者、是を案内として本城小倉に押寄せられ、如水公ハ足立山と言所に御本陣をすへらるゝ、當城主ハ毛利壹岐守なれハ家臣あつめ軍評定するといへとも、壹岐守常に家人ヲ悪くミて、短くわなる将なりけれハ、家人も殊の外悪くミける故に、大半如水公江降参す、此故に壹岐守ハ籠城も叶難し、如何すへきやと思ひける処に、如水公ヨリ扱ひヲ入給ひけれ者、壹岐守は殊の外悦ひ、いかて如水公に及へきや、此上は、降参すへしとて剃髪入道して城を明渡し、其身者中国ニこそ落行けり、此故ニ如水公戦ひ給わすし而勝時を三度上させ、城代を安置て、其身は筑前国江打通り給ふにも、當國は筑前中納言秀秋の領国なれハ上方ニて浦切して内府へ忠節を立られし事なれハ、其分に而差置給ひて、同国秋月を通給ふ所に秀秋の家臣とも此處に來りて如水公をもてなし、種々の御心應ヲなしにける、夫ヨリ筑後国柳川の城に來り給ふに、當城主ハ立花飛驒守宗茂ニて是又上方にて一味して関ヶ原敗軍に依て逃歸りて籠城するに、肥前国佐賀城主鍋島加賀守軍勢を以て城を責立ける折から、数日の城責なれ者、落城する事なけれハ、加賀守も責あくみて居りける処に如水公大軍にて來り給ひ、此躰を御覧ありて、立花は古今勇士なれハ、中かく力戦にてハ落城すまし、此上ハ味方的人数そんしししぬらんかハとて扱ひを入給ひ、立花氏

は大閥厚恩の將なれ者、義に依て籠城なるへし、早々城を明渡し候得者、拙者内府江申上奉り宜敷御執成を致すへし、誠に忠義の武士にて感心にたへ難しといへど、念頃(21)に仰入られしか者、立花飛驒守、如水公の懇情の使者を感じして、早々如水公の本陣江降人として出られければ、如水公殊の外御いたわり有て、城を受取、立花を味方ニ引入、此(22)後、内府方へ儀有るになして御領地安堵必定ならんと仰聞されける、世の中セひひつ(23)の役、怨水公ヨリ内府江此事を言上有けれハ、誠に立花氏は武巧ある家筋なれハ、迎、元(24)の如くに柳川の城拾貳万石を飛驒守江給わりけると也、夫ヨリ同国久留米藤四郎秀包、上方江有て敵方なりしか、城を出立せられし時家老ともへ仰置れけるハ、若敵方ヨリ城を責立候ハ、随分働て後、妻子を殺害し其身も切腹すへし、必ス恥辱を取事有へからず、若黒田如水公責立たら、是は常々懇情なる將なれ者、たやすく城を明渡し降参すへしと仰置れける故に、黒田家の籓の近寄ヲ見けれハ、家老とも相談いたし、早々城を明渡し怨水公江降人こそ出にける、怨水公御喜悅不斜、秀包の妻子こそ者、中国毛利家江人を附て送り給ひけるとかや、此処に暫く御休足まし、處に肥後国熊本之城主加藤主計頭清正大軍にて来らせ給ひ、如水公ニ對面して申されけるハ、拙者、茂頃日不快平ユウ致し、依て肥後国守土城主小西撰津守か上方ニて留主城を拙者一手にて責落し、依之貴公江御加勢の為是江罷越候処、最早柳川・久留米両城落去仕候、偏ニ貴翁御謀計ヨリ出為の忠義とこそ奉存せ、賀し申されけれハ、如水公も清正の入来を殊の外喜悅有り、夫ヨリ薩摩責の事共委細に仰談られ、此上ハ早々嶋津退治仕、九州悉く平均をなし申さんとて、肥前・加賀ノ城主鍋嶋加賀守江も示合され、降人之輩を先陣として久留米を立て、肥後国佐敷水俣と言所に味方を雲霧の如く出張して薩江責を催されける、既ニ薩州江責入らんと評定一決しける処に、嶋津ヨリ使者来りて、怨水公江申述けるハ、今暫く薩江責入候事御延引可被下候、嶋津義久ヨリ内府江御託事を井伊掃部頭ヲ以テ申上候処、追付御一左右候へし、夫迄御合戦御待被下候得と念頃(25)に申来りけれハ、如水公・清正其外味方の諸將御相談有て薩摩責之事御延引有て、當地江逗留ニ致る処に上方ヨリ内府公 江 御使者来りて、嶋津氏和談之事願奉りに依而御和談に相成候間、薩摩に責入候事有之間敷よし被仰付けれ者、如水公・清正 畏り奉り、夫ヨリ領地へ江こそ帰陣まします処に、黒田長政ヨリ御使者来りて申けるハ、今度関ヶ原御合戦の刻の次第つふさに言上す、是を聞召さるに誠に長政御老人の忠節故、天下太平と成る事とそ聞

上方勢敗北并如水公上洛之事

去程に慶長五年秋関東御進発之事、陸奥国会津城主上杉中納言景勝、叛謀の聞江有けれハ、状見の城に於て軍の御評定有り、則、内府公関東御進発に相極、大軍を引率し、御下向まします、状見御城代として鳥井彦右衛門ヲ召置れ、既ニ下野国宇都宮に御着座有て此処を御本陣として先陣の將を陸奥国江遣しける処に、上方にて石田治部少輔叛逆を企テ、西国の諸大名雲霧の如く是に一味して、一番に伏見の城を責立ければ、城代鳥井彦右衛門わつかの勢ヲ以て防ぎ戦といへとも、多勢ニ無勢、終に二の丸迄責敗られ、今ハかうよと見へし処に、鳥井彦右衛門本陣ヨリ切て出火花を散し四方八面に突立、働き討死しけれハ、依之状見の城落城する、夫ヨリ大津城主京極 備 從たて籠られけるを数日にて責落し、其後、美濃国大垣城主石田治部少輔、嶋津兵庫・同中務大輔・小西撰津守・安国寺惠慶に大軍を掻籠、西国ノ諸大名青野か原江しうまんし、弥御跡を企テけり、此事関東江聞江けれハ、内府公殊の外驚せ給ひ、諸士と軍の評定まします、陸奥国上杉景勝退治の事ハ同国城主伊達陸奥守正宗の一手の勢を押へとして宇都宮江ハ内府公の御嫡子江戸中納言秀忠公を残し置かれ、内府公自上洛有テ上方勢と御一戦有るへきに極りけれハ、先陣の大將は御目代として井伊掃部頭・本多中務大輔御兩人其外諸大名には、池田三左右衛門輝政・田中兵部大輔・福嶋左衛門大夫・黒田甲斐守長政等早々宇都宮を立て上方江こそ登られけるに、其跡にて内府公上意まし、けるハ、福嶋ハ大閥旧恩ノ者にして黒田長政元ヨリ其旧恩有る者也、長政は當家江無二の侍なれ者、若正則かす、めに寄て上方江とも引入者せましきやと思召、早々長政を呼返しとの上意なれハ、奥平藤兵衛を御使として遣る、早馬にて急キ、かハ、武蔵国にて追付て右の趣を申達しけれハ、長政早々宇都宮江こそ帰来る、内府公上意有りけるは、貴殿事ハ當家江無二の忠臣なり、然ル処、福嶋正則事、心元なく思召なれば、貴殿計り事を以て弥味方江引入へし、殊に今度御上洛の折から左衛門大夫か居城尾州清須の城を當分御借遊ハされ度候間、何とそ當時明渡し候様に申談られ候段との上意なり、長政畏り奉りければ、當時の御引出物として鞍置馬を御拝領被 仰付、難有早々宇都宮を發足す、清須城江来り、福嶋左衛門大夫ニ對面し上意の趣を申けれハ、左衛門大夫申けるハ、上意には候得とも、近隣ハ大軍敵方にして殊に弱共を當時江入置へき処茂無之候得ハ、此義ハ御宥免有之候而、別の城をも御借候様ニ貴殿御執成頼入由を申けれハ、長政申さる、ハ、其義甚以然るへからず、左候而ハ、内府御前御首能宜敷かるまし、拙者悪敷は計りましけれハ、ひらすらに城を御借可然よし利害を問ひて申されしかは、左衛門大夫も詮方なくて弥上意に任せ奉らん由を申けれ者、早々長政ヨリ関東上聞に達しけれハ、内府公殊の外御感不

浅、関東の先陣の大軍一同して一番に岐阜の城主岐阜中納言秀信の籠りけるを池田三左衛門輝政先陣して責落し、夫より大垣の城のこなたなる郷戸川に押来れハ、大垣の城より石田・小西・嶋津等の大軍、向の川岸に出張して備かけたりけれハ、田川兵部大輔・黒田甲斐守長政此両將受持給ふ、川上下を渡しけり、敵軍ヨリ雨まる雪の如く矢種をおします射掛たり、長政の先陣は後藤又兵衛基次・黒田三左衛門兩人にて真先ニ押渡して、三左衛門ハ毛付の敵を討取終に田中・黒田川を越、川端の敵を追崩しけれ者、井伊・本多其外諸勢追々に續て川を渡し敵を追立討取、大垣の城に追込けり、此段も上聞に達し御感甚し、其後青野か原江内府公着陣有りければ、赤坂と言処に御陣をなし給ふ、諸將前後左右に陣家をつらねたり、松尾山の麓に筑前中納言秀秋の陣家を構江られしも敵方なりしを、何とそ味方ニ引入、裏切を数度長政思われけれハ、家人大久保猪之助と言者を使として秀秋の家老何某迄申入けるハ、今度石田三成叛逆し秀頼公の命と称して西國諸大名をかたらひ、今右の如くに大軍にて内府公を討果し奉らん、然共関東は仁義の名將多けれハ必定御勝利となるへけれハ、早速味方江裏返り給わハ其家を起し給ふものといなるへしとそ申送りけるに、秀秋も石田かねんかん邪智深く故、殊の外憤たる、時節なりけれハ、早速此旨趣に依て約束裏切事御受合申され、互に人質を出して約束有けれハ、長政公殊の外喜悅して吉田内宮と大久保猪之助兩人を松尾山の麓、秀秋の陣所江遣し置けり、内府公此事を聞し召、殊の外御感不斜、又伊吹山の麓ニ毛利宰相輝元の陣家江有ル吉川藏人・益田越中兩人、毛利家の先陣の大將なり、吉川は長政二殊の外念頃なれ者、使者として味方ニ来られ候ハ、内府公江申上宜敷執成申上んと委細に申入られけれハ、吉川元より関東に心多かりけれハ、早速長政のすゝめに随ひけれハ、内府公も殊の外御感不浅、関ヶ原御一戦の砌にも益田越中か手よりハ鉄炮ハ稠敷打掛しかとも、吉川か備ヨリハ鉄炮を放事なくて招へたり、此故に軍御勝利の後、吉川を御前に召連、周防・長門兩國を蔵人に下され吉川者其領内にて六万石ヲ配知致けり、且又長政の高名なれハ、長政江御感状を出し、中にも吉川か忠節の程をのせられしか者、吉川家二是を乞受て今に家のきほとして所物せしと也、既二関ヶ原御合戦初り、敵・味方合戦最中となりし時、松尾山麓秀秋の陣所しつまり返りて裏切の事もなかりけれハ、此時関東勢少々旗色悪敷見江し処に長政も筑前中納言の事心元なく思われけるに、此時秀秋の大軍横合より関東勢を切立ける物ならハ上方勢勝利たらんに、常々石田三成邪二而天下を奪わんと思ひける故に奉行の権威ヲ振ふ事甚しく、邪智を致しけれハ、悪徳大名多し、其人二同者浮田中納言秀家・毛利宰相輝元・筑前中納言秀秋・嶋津兵庫頭義久、大國の領主多かりけれハ、我も天下を趣二依てハ取へきなんと思ひける故に、石田か妄忘の計り事を用ゆる者そなかりけり、弥筑前中納言の陣所ヨリ契約の裏切もなかりけれ者、内府

の命に依て福嶋左衛門大夫の陣所ヨリ五拾挺の玉なし鉄炮を松尾山の方江打はなしけれハ、秀秋是を聞給ひて時分ハよしと時の聲をとつと作りかけて山をさかり二大谷刑部少輔か後よりおめきさけんて切てかゝれ者、敵方の相図相違して前後ヨリ責立けれ者、おしかわいてたまるへき、軍散乱して爰に最期の責戦ハ関東の諸勢、是に力を得て、命を限りに責立けり、黒田甲斐守長政ハ石田三成か物頭嶋左近といへる者の手に向われけるがひたくとさくの片原迄押寄りて戦ふ処に左近名を得し者なれハ騎馬武士をすくつて防ぎけれハ、長政ちりくりに打なされ、既に討れ給ひぬへきに見へし処に、家臣菅の和泉足輕五十人預りけれハ、是を見て小高き所ヨリつるべはなちに打懸させけれハ、嶋左近か手の者共將棋たをしに打殺されしところなれハ、長政の家臣竹森武藏、黒田の旗を立直しければ、此手の勢、我もくと命を限りに敵兵を切立責立勇けれハ、嶋左近も終に討死、右往左往に落て行、嶋津兵庫頭義久の大軍の物頭嶋津中務大輔勇力を振ひて関ヶ原勢を切立く働きけるに安藤帯刀の勢、嶋津勢とかけ合せ、火花を散らして戦ひしに、中務大輔か勇勢ちりくりに切ちらし、帯刀討取けるに、成瀬隼人は是を見て帯刀討すなと言まゝに大勢のひかへし処に切て入れ者、嶋津の大軍おつとりこめて終に隼人を討取けれ者、井伊掃部頭の大軍、うしつわく如く二かけ来りて責立けれハ、大將嶋津中務大輔も討死し、終に嶋津勢敗北す、石田・小西も打破られ、いまは叶わしとて伊吹山ヲ谷深くこそ落行ければ、筑前中納言の大軍弥切廻れば、終に大谷刑部少輔の備江打破られ、諸軍勢も落失けり、或は討死し残りすくなく成りけれハ、刑部少輔ハ病者なる故に常に戦場にも乗り物二乗て再會けるか、近臣とも立寄て申けるハ、最早味方敗北して石田殿其外の大將達落行給ひ候間、一先落行せ給へしと言聲に終ぬ所に乗物の内ヨリ血塩なしけれハ、戸を引明て見けるに最早自害して有けれ者、首打落して深田ノ中に隠し置て、何茂最期の供をぞ致しける、嶋津義久は敗軍の勢を引具して伊吹山を傳ひに落けるに、踏違ひいかはせんとあわてふためきける処に一羽のうさきいつくともなく来りて道をおしへけるそ不思議なる、是を便りに落行けれハ、漸々一命を助りて大坂江こそ逃帰り、夫ヨリ舟に乗りて九州江帰國致しける、此うさきは神明の化鳥なるへし、神佛三宝を常に信心致されける故に不思議の神の恵そ難有し、関東勢者勝時を三度上て逃るを追討して分高名の諸將甚多し、赤坂の御本陣に者、諸大名を御前に召出され、首実檢有り、筑前中納言も長政の案内にて御前へ出らるゝ、内府公上意有けるハ、秀秋江も今度の裏切の忠節聞召れ、誠に感心するに餘り有、此度の忠賞に依て筑前国二并肥前之内式郡、筑後之内式郡只今領地するといへとも、備後・備中兩國に改メ給わるへしとの上意難有く退出す、其後長政をかたわらに召され、誠に貴殿の忠節なくん者、御勝利も危ふかりぬへし、偏に如水父子の忠戦に天下大平の基ひをおこせり迎、長政の左り

の手を内府公御いたゞき遊ハしそ難有し、今度の御忠賞と而豊前国六郡拾貳万石を改メ給ひ筑前一圓にこそ賜りける、采知五拾貳万石とそ聞し、石田治部少輔ハ伊吹山谷深く逃行けるか、昼ハ人目有れ者、或ル菜園畠の中に隠れ居て飢に及び、夜ハ家路に來りてなんとしけるか、或日所之者之かりに來て見付、元ヨリよしミの者なりければ、我家に伴ひ來りて食物等をあたへ、いたわりければ、石田申けるハ、人間ハ浮しつミの有者なれハ、拙者不運にして斯落人となるといへとも再ひ敗北ヲ集メ、天下を握らハ其時こそ貴殿の報恩に者大分の所領ヲあたへしとて、夫ヨリ物語とも致し、夜に入れば、蜜に代官所江うつたへければ、捕手の役人等來りて生取之、京都江登し内府公江渡し來り莫大之忠賞にそ預りける、小西行長有ルけん堂に有けるを、庵主立出て咎ければ、小西玆敷對面致ス物かな、我落人となりぬるは最早運命尽キたり、貴殿生捕て莫大之忠賞に預るへし、先年したしかりしときの恩を送らんといへは、此出家申けるハ、いやとも御自害あるへし、いかて生捕浮め二逢セ申さんと云、行長申けるハ、我者高麗陣の時切支丹宗門を傳へ來り、依之刃物を以て死する事難成し宗門なれハ、ひたすらに生捕へし、是ハ親重代の太刀、只今迄我是を所持す、貴殿二あとふへしとて遣しければ、此泣々受取テ早速生捕、内府江そ註進致しければ、京都江引せらるゝ、安国寺も生捕らるゝ、佐和山城と近江国ニあり石田治部少輔か居城、此城に父石田將監籠城しけるを、内府の上意に依て責立させられしに、城中ヨリ防ぎ戦ひ、妻子を殺し將監も切腹して一時に火を掛テ焼立けるとかや、内府公御上洛の後、石田・小西・安国寺等を京都大路ヲ渡して六条川原にて首を刎、こくもんニこそ掛られける、浮田中納言ハ今度の惣大将也ければ、八丈か嶋江そ流されける、此故に天下とふして内府公の御治世となり千秋萬歳とて尊敬し奉るとそ委細に御物語をなしければ、黒田如水公聞し召御喜悅遊はして、後のたまひけるハ、扱も長政か計り事勝れたるといへとも、合戦早速に相止候事残念也、我勢を吟味するに貳万余騎となりたり、唯今九州平均の砌なれハ、此勢を以て中国に切て入、毛利家を降参せしめ、其後京都に登り弥大軍とならハ、関東切随へて天下の主とも成へきもの、残念ハ此事也、諸牢人共も隙取なれ者、難義すへしこそ、註進有て夫ヨリ中津川の城ニ御帰陣遊わして日をおつて京都江こそハ登り給ひける、大閤秀吉公の御わむれ二天下を奪ひぬらん者ハ我將とてハちんばより外ハなし、恐しき智謀有者そと仰られしも至極かなと後にそ人皆恐れける、

怒水公鹿ヶ谷御逗留并筑前国入部之事

一、如水公京都二着給ひて鹿ヶ谷と言所に住せ給ひしに、此時内府家康公、二条御城に

すませ給ひし時也、毎日く越前中納言殿鹿ヶ谷御見舞二御出遊され軍の物語等を聞召ける、又茶ノ湯師等をかたらい数寄屋にて専ノ利休か業をなして遊興をなし給ひ、連歌をも致し風雅の道好み給へハ、一人御樂に催されける、或時二条の御城に怒水公來らせ給ひて内府御目見江の刻に上意有ける者、今度天下分目の軍たりし時、偏ニ子息甲斐守か忠節よりおこり、依之筑前国を恩賜として被下たり、貴翁事、九州一乱の時、豊後国大友を生捕にし、其外所々の城を責落しける事、古今玆敷忠義なれハ上方近隣において此恩賜の地を給わるへし、貴翁常々我前に有て上意有、如水答江奉り給ひけるハ、有難き君命に而候得ハ我持病多候得者、此事わ御許害候へし、倅長政ニ過分の領地給わり候得ハ、一生安樂に暮し申度候由、しきりに御辭退有けるハ、此事は止ニけり、依種々の御引出物等数多給わりて後、御暇給わりければ、其後京都暫く逗留して四方を遠見して中津の城江歸り筑前国名嶋城江入部有て福岡の城を築立給、越事七ヶ年の間公命なれハ名嶋城を引テ御普請有り、諸士の屋敷・町家をならへらるゝ、又國中に端城を築、家臣を置て守らせらるゝ、黒崎城ニハ井上周防式万石、上座郡摩手之城ニハ栗山備後式万石、同郡小石原ノ城ニハ野村大學六千石、嘉麻郡大隈城ニハ後藤又兵衛基次壹万五千石、鞍手郡鷹取城ニハ毛利但馬壹万石、志麻郡高治城ニハ菅之和泉三千石、遠賀郡若松城ニハ三宅若狹三千石、以上七ヶ所ニ端城を築て守らせらるゝ、諸士に軍巧の賞を給わり領地くゝに家來ヲ置て采知を安堵し、如水公ハ福岡城南丸に常ハ住給ひ、又大宰府天満宮の御靈檢を御尊敬遊わし、隱居宅をしつらいて常に來り給ふに、大鳥井・小鳥居の社司等招つとハ常に連歌をなしてそ御遊興をなし給ひ、殊ニハ當社の廊門・廻廊・末社四十二字を御建立、有つたわれたるをおこし貳千余石の神領の地を御寄進有りければ、日々に神慮を和らけ、右より隔りける太宰府のこなたに横岳山有テ崇福寺いにしへよししか共、乱世の砌りにして名のミなりしを箱崎松原の中に改メ、尊斜し給ひ寺領三百六拾石を寄進せられ、則、大守の菩提所となし給ふ、元和九年三月廿日と申に如水公五拾九年にして薨御せらるゝ、此寺ニ送り葬して法名ヲ龍光院如水軒圓清大居士ト号し奉ル、誠ニ一代の軍巧上ケてかそへ難し、又常には柔和して家臣の勇むるを用ひ悪を退け、忠臣をねぎらい給ひければ、人として随ひなひかざるハなかりける、黒田筑前守源朝臣長政公ハ筑前国御入部の後、筑前守に任ヌ、從四位備從になり給ひ、父の道を学ひ、忠臣を厚く用ひ給ひければ、福岡市中繁昌して萬代ニ易と、鶴者千歳の万化を悦び、龜者萬年の御地に住テ、松吹風は世の中の静、数々君のめくみを寿て豊後国石垣原一戦記と一冊にこれを書備之りぬ、

石垣原一戦記巻終り

1 大友義統(一五五八〜一六〇五)は永禄元年(一五五八)、義鎮(宗麟)の長子として誕生。母は豊後国国東郡安岐郷奈多八幡宮の神官奈多鑑基女。童名長寿丸また五郎。足利義昭の諱字をうけ義統、天正十六年(一五八八)ごろ豊臣秀吉の諱字をうけ吉統。左兵衛督。大友羽柴豊後侍従。文禄二年(一五九三)入道宗厳、のち中庵と改む(渡辺澄夫分担執筆「大友義統」〔日本近世人名辞典〕二〇〇五年、吉川弘文館、一六五・一六六頁)。

2 毛利太兵衛は幼名万助、のちに太兵衛と称し、黒田家の筑前入国後は但馬と改める。諱は友信。弘治二年(一五五〇)播磨国に生まれる。幼少より黒田家に仕え、常に黒田勢の先鋒を勤めた。福島正則から名槍「日本号」を呑み取ったことで有名。元和元年(一六一五)六月六日没。享年六十歳(「黒田家臣傳」〔益軒全集 巻之五〕一九七三年、国書刊行会、五五〇〜五五四頁)。

3 實相寺山(現大分県別府市)は石垣原扇状地の中央部にあり、標高一六九・八メートル(「日本歴史地名大系四五 大分県の地名」一九九五年、平凡社)四七八・四七九頁)。

4 立石は鶴見岳の東麓、石垣原扇状地と朝見川の断崖崖上に立地する(註3前掲書四七五・四七六頁)。

5 小林新兵衛は、慶長七年(一六〇二)十二月二十三日付、黒田長政知行宛行状写によると、早良郡有田村のうち二百石を与えられている。また、実名は重勝、桐山孫兵衛家来との注がある(「福岡県史 近世史料編福岡藩初期(上)」一九八二年、福岡県)五四二号文書 三二二頁)。また、福岡藩の代官衆の一人である(福岡地方史研究会編「福岡藩分限帳集成」一九九九年、海鳥社)三一頁)。

6 中津川城(中津城)は現在の中津市中津二ノ丁にあった。北東流する中津川(もと山国川の本流)を西にして、扇形に築城していることから扇城ともいい、地名から丸山城・大家城ともよばれ、また検地に反対して滅ぼされた大丸越中守の居城を壊し、その材木をもって修造したため小丸丸城ともいったという。周防灘に注ぐ山国川河口部右岸にあった。天正十五年(一五八七)七月三日豊臣秀吉は豊前六郡を黒田孝高(如水)に安堵した(豊公遺文)。如水は翌一六年尾畑氏の居城をにわか修理しかつ嘗作した中津川の城に入ったという(黒田家譜(註3前掲書九九頁))。

7 八丈か嶋は八丈島のこと。東京都の中心から南方二九〇キロの洋上に位置する島。面積は六八・三三平方キロ。流入島として知られており、宇喜多秀家・菊池民部・近藤富蔵(重蔵の子)などが配流されている(段木一行分担執筆「八丈島」〔国史大辞典〕)。

8 中川修理太夫は中川秀成(ひんがら)のこと。元亀元年(一五七〇)摂津国に生まれる。父は中川瀬兵衛清秀。秀吉に仕え、朝鮮の役で兄秀政が討ち死にした後、遺領を継ぐ。文禄三年(一五九四)二月、播磨国三木城から豊後国岡城に移され、大野・直入・大分三郡のうちにおいて七万四千石を領す。慶長十七年(一六一二)八月十四日、岡において没す。享年四十三歳(「寛政譜 第五」二七・二八頁)。

9 熊は隈(日隈)のことと考えられる。日隈城は現、日田市隈一―二丁目、庄手中ノ島町にあたり、三隈川が隈川と庄手川に分流する地、日田三丘の一つ日隈山にある城跡。その北部に隈町と外堀があった。遺構は確認されていない。隈城ともいう。慶長元年(一五九六)毛利高政が拝領高二万石で入部し隈城に入った。高政は五層の天守と三階の櫓を建て、さらに外堀を掘り、城下町を整備した。城の構造は南西が大手門、東を搦手とした。山は三段となり、中段に井戸が掘られた。下段の

北側に馬場があった。北西の裾部分で川から取水し堀とした。堀は江戸中期までは残っていたという。慶長五年関ヶ原の戦いで城は黒田如水に占拠され、家臣の栗山利安が在城し、一年間支配した。同六年佐伯に転封となった毛利高政は引続き蔵入地預を命じられ、隈城番毛利隼人佐を置いて管轄にあたらせた(註3前掲書九七三頁)。

10 多賀牟礼は角牟礼のことと考えられる。角牟礼城は現在の玖珠町森角理にあたり、玖珠川の支流森川とその分流大丸川の分岐点の西側、標高五七六メートルの角理山頂にある中世の山城。文禄二年(一五九三)の大友氏改易後は毛利高政が預かっていたが、慶長六年(一六〇二)同氏が佐伯に移った後は黒田如水に預けられていた(「黒田日記」など)(註3前掲書九二九頁)。

11 栗山四郎右衛門は幼名善助、後に四郎右衛門と号し、黒田家の筑前入国後は備後と改める。実名利安。隠居剃髪して庵と号した。天文二十年(一五五一)誕生。先祖代々赤松氏の家臣であったが、黒田孝高(如水)の将来性を見込んで黒田家に仕官する。母里友信・井上之房とともに黒田家において重きをなす。寛永八年(一六三一)八月十四日病により没す。享年八十三歳(註2前掲書五五四〜五五九頁)。

12 「扱を入」とは講和を議することを意味し、「扱い」「嘍い」とも記される。小和田哲男氏は、「無縁の原理」ののちとして、出家している僧侶が使僧として送りこまれることもあるし、場合によっては矢文で降伏を呼びかけることもあった、と述べられている(小和田哲男「戦国の合戦」二〇〇八年、学習研究社、二〇七頁)。

13 垣見和泉守(一六〇〇)は実名一直。文禄三年(一五九四)豊後国東郡富来城主となる。関ヶ原の戦いには西軍に党して伏見城攻の攻撃に参加、さらに近江瀬田城を守備し、ついで石田三成・小西行長の軍に属して美濃大垣に進出、九月十四日、福原長堯・相良頼房(長毎)・高橋元種・秋月種長・熊谷直盛・木村総右衛門と大垣城を守り、一直は直盛・総右衛門とともに二ノ丸に拠った。しかし変心して東軍に応じた三ノ丸の頼房・元種・種長のために十八日の早朝(一説に十七日)誘殺された(岩沢彦彦分担執筆「垣見一直」〔国史大辞典〕)。

14 熊谷内蔵之丞(内蔵允。(一六〇〇))は実名直盛。豊後国安岐城主。関ヶ原の戦いでは西軍に与し、八月二十五日、兵四百五人を率いて守備していた近江勢多橋から美濃大垣城に入り、二ノ丸を守ったが、同城三ノ丸守将相良頼房(長毎)らの裏切りにあい、九月十七日、三ノ丸西の門口で殺された。彼は出自が明らかでないが、資性勇猛、また石田三成の女婿であったともいう(染谷光広分担執筆「熊谷直盛」〔国史大辞典〕)。

15 セいろふ(井楼)は戦陣で、敵陣を偵察するために材木をいげたに組んでつくるやぐら。みせやぐら(せいろう「井楼」〔日本国語大辞典〕)。笹間良彦氏によると、城内を見通すための組立櫓を沢山立てたり、攻め方にも多様な工夫をこらして城を陥すように努力した、とされる(笹間良彦「図説 日本戦陣作法事典」二〇〇〇年、栞書房、一三六頁)。

16 この史料では嶋津義久、嶋津義弘が混同されているが、兵庫頭は義弘で、関ヶ原合戦に参戦したのも義弘である(山本博文「島津義弘の賭け」(一九九七年、読売新聞社)二二五〜二七六頁)。

17 周防上ノ関(現山口県上関町大字長島)は熊毛半島の先端、西海上に位置し、東北から南西に長い島。長島とい上関本島とも称する。東北部には上盛山がそびえ、島のほとんどが丘陵地。近

世は大島郡で、上関宰判に属した(『日本歴史地名大系三六 山口県の地名』(一九八〇年、平凡社)一六一頁)。

18 香春山(香春岳)は香春町(現福岡県田川郡)の中心部から北側にそびえる小山塊。南から一ノ岳・二ノ岳・三ノ岳と称される三つの峰で構成される。中世には香春岳城が築かれ、一ノ岳の南麓には現在も香春神社が鎮座する(『日本歴史地名大系四一 福岡県の地名』(二〇〇四年、平凡社)一一八二・一一八三頁)。

19 足立山(現北九州市小倉北区)は小倉北区の南東部、小倉南区境にある山。南北に連なり、山系全体を総称して足立山という。最高峰は霧ヶ岳で標高五九七・八メートル。北西に妙見山がある。古くは安立山・安達山とも記し、竹和山とよばれた(註18前掲書二〇頁)。

20 毛利壹岐守は毛利勝信(?)(慶長十六年(一六一一)五月七日)のこと。尾張国出身で秀吉の黄母衣衆に加わり、当初は森姓を名乗って彦岐守吉成と称した。天正十五年(一五八七)七月の知行割りで、勝信は企救、田川二郡で六万石を領した。関ヶ原の戦いでは西軍に属して敗れ、子の勝永とともに土佐の山内一豊に預けられ生涯を終えた(永尾正剛分担執筆「毛利勝信」『福岡県百科事典 下巻』一九八二年、西日本新聞社)九五九頁)。

21 立花宗茂は初名宗虎で数度改名している。官途は天正十五年(一五八七)七月二日、従四位下侍従、左近将監となる。飛騨守となるのは元和八年(一六二二)十二月二十七日である(『寛政譜 第二三三〇(三七二頁)』)。

22 立花宗茂の筑後柳川再封が決定するのは元和六年(一六二〇)十一月二十七日である(註21前掲書)。

23 藤四郎秀包は毛利元就九男、毛利(小早川)秀包のことである。永禄十年(一五六七)に生まれ、兄小早川隆景の養子となり小早川を称した。天正十五年(一五八七)隆景が筑前国に封ぜられるにあたり、秀包も七万五千石を領知し久留米城を居城とした。文禄二年(一五九三)四月七日加増を受けて十三万石を領した。慶長六年(一六〇一)三月二十三日、赤間関にて没す。享年三十五歳。正室は大友義鎮(宗麟)の女で、大友義統とは義兄弟の関係にあった(『寛政譜 第十二四二頁』)。

24 彦根藩主井伊家当主の官途は代々掃部頭であるが、関ヶ原合戦に参加した井伊直政の名乗りは兵部少輔である(『寛政譜 第十七』二八七〜二九二頁)。直政の跡を継いだ直孝は慶長十年(一六〇五)四月十六日掃部助、同十五年掃部頭(同二九二〜二九六頁)。

25 鳥居彦右衛門は実名元忠。天文八年(一五三九)生まれ。鳥居忠吉の子。家康の関東入国後、下総国矢作において四万石の所領を与えられる。慶長五年(一六〇〇)、家康の上杉征伐においては、伏見城守備のため同城に残り、同年七月二十五日からの西軍方の攻撃により八月一日落城。奮戦するも最期は自ら雑賀孫市重次に首を与え自害。享年六十二歳(『寛政譜 第九』二八九〜二九三頁)。

26 下野国宇都宮は、ほぼ田川より西、釜川より南に位置し、中世は宇都宮明神の門前町・宿場町で、慶長二年(一五九七)の宇都宮氏改易以後、近世は宇都宮藩の城下町。北関東の要衝として日光街道と奥州街道の分岐点でもある。中世末期から近世初期にはすでに町が構成されており、一人の町年寄が城下の自治を執行していた。「宇都宮故実抄」によれば、慶長五年(一六〇〇)会津の上杉景勝攻めに際し、徳川秀忠は宇都宮城を陣所とした。その折、火事の用心、売買自由とともに、

町年寄に人質を出すよう命じている(『日本歴史地名大系九 栃木県の地名』(一九八八年、平凡社)三八三〜三八五頁)。「内府」、すなわち家康は下野国小山まで進んだが、宇都宮には到っていない(『黒田家文書 第一巻 本編』(一九九九年、福岡市博物館)三四・三五頁「御書之写附寛書」)。

27 大津落城、城主京極高次が降伏したのは慶長五年(一六〇〇)九月十五日、関ヶ原合戦当日のことである。本史料においては関ヶ原合戦前のように記されているが、それは誤りである。大津城を攻めていた立花宗茂らは「関ヶ原」の主力戦には参加できなかった(中野等「立花宗茂」(二〇〇一年、吉川弘文館)一一〇・一一二頁)。

28 美濃国大垣城は伊藤盛正(?)(元和九年(一六二二))が三万四千石を領し同城城主であった(高柳光壽「松平年一」『戦国人名辞典』(一九七三年、吉川弘文館)二四頁)。盛正は関ヶ原合戦に際して石田三成に同城を提供したが、石田三成の居城は近江国佐和山城であり、三成が「大垣城主」というのは適当でない。

29 島津中務大輔は島津豊久のこと。天正十二年(一五八四)三月、父家久に従い龍造寺隆信との合戦で戦功をあげる。同十六年八月四日、秀吉から日向国佐土原において九百七十九町地を与えられる。小田原攻め、朝鮮にも出陣し、秀吉から多くの感状を与えられる。慶長四年(一五九九)二月、中務大輔・侍従に任官される。翌五年の関ヶ原合戦において奮戦し討ち死に。享年三十一歳(『寛政譜 第二三三六頁』)。

30 奥平藤兵衛は実名貞治。奥平貞勝の三男。はじめ秀吉に仕え、慶長五年(一六〇〇)家康が上杉景勝征伐を行った時、付き従い小山に着陣。関ヶ原合戦にも供奉する。小早川秀秋の内応の状況うかがうため九月十四日、子の五兵衛重盛とともに秀秋の松尾山の陣に赴き、貞治は同陣に留まる。九月十五日の本戦で大谷吉継・平塚為広の軍勢と戦い討ち死に(『寛政譜 第九』二〇八頁)。

31 光成準治氏によると、通説では黒田長政は一旦西上した後、増田長盛ら三奉行の決起への参画を知った家康から呼び返されたこととされているが、実際には『黒田家文書 第一巻 本編』四号文書「徳川家康書状」の「重可令相談与存候處、御上故、無其儀候、委細の様子、羽三左へ申渡候之間、能様可被相談候、」を根拠に、長政は呼び返されていない、とされる(光成準治「関ヶ原前夜 西軍大名たちの戦い」二〇〇九年、NHK出版、七六・七七頁)。

32 家康に対しての居城提供については山内一豊の進言が有名である。慶長五年(一六〇〇)七月二十四日の、いわゆる「小山軍議」において一豊は次のように発言した。「速に御出馬ありて賊徒を退治し給はむに在いては、先掛川の居城を御譜第の士に渡し、又人質をもたてまつるべし」と。その発言によって「東照宮はなほだ御喜悅ありて、すなはち内藤三左衛門信成を以て掛川の城をまもらしめ給ひ、また人質として 姪 山内吉兵衛政豊を参らせしかば、小田原城におかる。これによりて東海道の諸將をのく、其城を開き、人質を献ず。」(『寛政譜 第十三』三〇三・三〇四頁)というようになった。もちろん「東海道の諸將」には尾張清洲城主の福島正則も含まれ、正則が居城提供に難色を示したという史料は管見の限り見当たらない。しかし、難色を示さなかったということも史料から判断できず、検討を要するところである。

33 黒田三左衛門は実名一成。本姓は加藤。幼名を玉松、長じて三左衛門、黒田氏筑前入国後は美作と称す。隠居剃髪して睡鴨と号す。元龜二年(一五七一)生まれ。孝高(如水)が荒木村重によつ

て摂津有岡城に幽閉されたとき、三左衛門の父加藤又左衛門は孝高に好意的に接し、そのため有岡落城後、九歳の玉松、のちの三左衛門は孝高のもとに引き取られ黒田の姓を与えられて厚遇された。天正十二年（一五八四）十四歳のとき、和泉岸和田での合戦で初陣。その後も数々の戦で高名をあげる。明暦二年（一六五六）十一月十三日、病のため福岡で没す。享年八十六歳（註2前掲書五六一〜五六四頁）。

34 赤坂（現岐阜県大垣市）は東端を南流する杭瀬川（赤坂川とも称する）右岸に位置し、村内を東西に通る中山道の赤坂宿を中心とした街村。南は牧野新田・荒尾村・与市新田。宿の北方に石灰で名高い金生山、南方に勝山がある。東山道の要衝として開け、鎌倉期以後は赤坂宿を中心に発展し、江戸期から赤坂河岸があった（日本歴史地名大系二 岐阜県の地名（一九八九年、平凡社）二六八頁）。

35 松尾村（現不破郡関ヶ原町）は関ヶ原村の西に位置し、西方の藤下村境を藤古川が南東流する。松尾山（二九三・メートル）上の長亭軒城は大永年間（一五二二〜二八）近江の浅井氏の家臣堀氏の居城であったが、竹中重治の功により織田信長の勢力下に入った。松尾山城ともいい、土塁・堀が残る。慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原の戦では同山上に石田三成方の小早川秀秋が陣を構えるが、秀秋の反応により東軍の勝利を導いた（註34前掲書 一〇五頁）。

36 大久保（大窪）猪之助は慶長期（一五九六〜一六一五）、福岡藩の「組頭」として四百石の禄をはりてゐる（註5前掲「福岡藩分限帳集成」一一頁）。

37 秀秋の家老には稲葉正成・平岡頼勝らがあった（高柳光壽・松平年一「戦国人名辞典」（一九七三年、吉川弘文館）三七頁・同二〇四頁、阿部猛・西村圭子編「戦国人名事典」（一九八七年、新人物往来社）一一四頁・同六五七頁）。

38 吉田宮内は実名生秀。幼名を小平太。父は吉田喜三右衛門重生。重成は赤松一族吉田氏の末流であったが、没落して黒田孝高（如水）に仕えた。重生四十余歳の頃、孝高から八代六之助（当時二十歳前後。のちの吉田六郎太夫長利（宅岐とも称す）に吉田姓を授けることを命ぜられ応諾した。これが後、福岡藩において家老を輩出する長利を始祖とする吉田家の来歴である（九州文化史研究所古文書目録十九 吉田家文書 一九九四年、九州大学文学部附属九州文化史研究施設。「凡例」）。一方、生秀は播磨国で生まれ、幼少の時から黒田孝高に仕え、関ヶ原合戦の時には小早川秀秋のもとに人質として送られる。この時十八歳。黒田長政の筑前入国後、二千六百石を賜り馬廻頭となる。父重生が家老であったため、生秀は年始の儀式を司ったという。生秀養子の吉田小平次（榎橋七兵衛の弟）は千五百石を与えられたが、島原の陣から凱旋後上方に出走した。生秀実子の九兵衛生昭は島原の陣の際、福岡藩二代藩主忠之の陣営に出向き、吉田宮内生秀の実子であることを訴え、忠之はこれを認め、小姓組に加え小河縫殿助常章の備えに配した。帰陣後、生昭は新知三百石を賜った（福岡藩 吉田家伝録 上巻一九八一年、太宰府天満宮。一〇〜一三頁）。また、生昭は寛文期（一六六一〜一六七三）には普請奉行となっている（註5前掲、福岡地方史研究会編「福岡藩分限帳集成」四五頁）。

39 伊吹山は伊吹山地の南端にある主峰で、山頂部は春日村と滋賀県坂田郡伊吹町にわたる。同町域にある最高点は標高一三三七・四メートル（註34前掲書三〇一・三〇二頁）。

40 毛利秀元は天正七年（一五七九）、備中国猿懸城で誕生。父は毛利（穂田）元清（元就六男）。同十三年、毛利輝元の養子となる。同十八年右京大夫に任官され、文禄元年（一五九二）十月十一日正四位上侍従に叙位任官、同四年七月二十七日には正三位参議（宰相）に昇進。関ヶ原合戦では西軍方として南宮山に布陣するも、敗北し大坂に引き揚げる。関ヶ原合戦後、毛利家が周防・長門に減封となったとき長門豊浦郡の地を与えられ長府を居城とする。慶安三年（一六五〇）閏十月三日没。享年七十二歳（寛政譜 第十一 二五二〜二五五頁）。

41 吉川藏人は吉川広家のこと。広家は天正十一年（一五八三）藏人頭に任官されている（寛政譜 第十一 二六四頁）。「大日本古文书家わけ第九 吉川家文書之二」（一九七〇年、東京大学出版会）六一・六二頁）九二号文書、（慶長五年）七月十四日付、榊原式部太輔（康政）宛吉川広家自筆書状において、差出名は「吉川藏人」となっている。

42 当時の毛利家中益田家当主は元祥であるが、彼は越中を名乗っていない。後代の益田家当主、すなわち七兵衛尉元亮が越中守を名乗るため（大日本古文书家わけ第二十二 益田家文書之一）（二〇〇〇年、東京大学史料編纂所）三三八号文書、慶長十七年（一六一二）十一月二十八日付「毛利秀就受領書出」、三〇三頁）、作者が誤って「越中」としたのであろう。元祥は慶長五年八月段階の書状において玄蕃頭とされている（益田家文書之二）（二〇〇三年）四二三号文書（一一頁）。

43 益田越中、すなわち益田元祥のことと推測されるが、同人が関ヶ原において積極的に戦闘に参加したことは管見の限り史料から見出すことはできない。

44 （慶長五〇一六〇〇年）十月二日付、吉川広家宛黒田長政起請文の二条目には「キ所様御律儀之事者、井兵少御前之御取成共、無残所候、中國之内ニ而、為押一ニ國之間、御方様へ可被下之旨、御議定之由候、此上者内府様御直之御墨付取候而、可進之由、井兵少堅請か、り被申候」とある（中村孝也「新訂 徳川家康文書の研究 中巻」一九八〇年、日本学術振興会、七七三・七七四頁）。すなわち、吉川広家の徳川方に対する忠誠を井伊直政が余すところなく家康に取り次ぎ、中国地方において一、二ヶ国を広家に与えることが決定し、さらに家康のお墨付きを広家に与えることを直政が請け合っている、という趣旨である。それに対して広家は慶長五年（一六〇〇）十月三日付、福島正則・黒田長政宛吉川広家起請文において次のように心情を吐露している。「輝元御理聞召分無御座、私儀於蒙御恩候者、先達而關東迄御理申上候所茂、私一分之身上氣遣仕候而、本家を見捨候様ニ無御座、此段非本意候、輝元心底者不及申、他人之見聞迄も無面目次第第二御座候、兎も角も輝元同罰被仰付候様、幾度も御理可申上覺悟、他事無御座候事」と（同七七四〜七七六頁）。つまり、輝元の言い分が聞き入れられず、広家が増されることは本意でない。輝元の心情はいうまでもなく、世間においても面目を失うことである。兎も角、輝元同様に処罰していただきたいと何度も申し上げる覚悟である、と広家は述べている。このような広家の歎願によって、慶長五年十月十日毛利家に周防・長門二国が安堵された（大日本古文书家わけ第九 吉川家文書之二）九一四号文書、七一・七二頁）。同年十一月二日、広家はその内、玖珂郡・大島郡の内て三万四千三百七十石を与えられた（大日本古文书家わけ第九 吉川家文書之一）六九七号、「福原広俊外二名連署領地打渡注文」六三九・六四二頁）。「吉川者其領内にて六万石ヲ配知致けり」とあるが、吉川領が六万石

余となるのは、寛永十一年(一六三四)閏七月二十六日のことである(同二〇五号、「吉川広正身上覚書」、一七四・一七五頁)。

45 嶋左近とは島清興のこと。山本博文氏によると、名は勝猛が有名であるが、『根岸文書』に島左近清興の名乗と花押がみえるので清興とすべきとされる。彼はもと筒井氏の家臣であったが、浪人して一時興福寺に身を寄せ、のち近江国へ下った。彼は高名の勇将であったので石田三成の招くところとなり、三成は自己の所領四万石のうち一万五千石を彼に与えて優遇したといわれる(山本博文分担執筆「島清興」〔竹内誠・深井雅海編「日本近世人名辞典」二〇〇五年、吉川弘文館、四五九頁)。

46 菅和泉は初名孫次、後に六之助と改め、晩年は和泉と号した。実名正利。永禄十年(一五六七)九月十九日、播磨国揖東郡越部で生まれた。父の名は七郎兵衛、剃髪して一翁という。天正十一年(一五八三)四月の賤ヶ岳の戦いで初陣。関ヶ原合戦では足軽五十人を引率し、九月十五日の本戦前、合渡川合戦で手柄を立て、小早川秀秋に裏切りをすすめる使者を勤めた。また本戦当日には石田三成の先鋒島左近の強兵を撃退した。黒田長政の筑前入国後怡土郡で三千石を与えられた。高祖山古城の北、飯氏村に親族従者を置き、黒田領西部の備えとした。寛永六年(一六二九)六月二十九日病にて没す。享年五十九歳(註?前掲書五七一・五七二頁)。

47 竹森武蔵は詳細不明である。該当する人物として考えられるのは、竹森清左衛門貞幸である。彼は竹森新右衛門次貞(石見)の嫡男で、天正六年(一五七八)播磨国姫路に生まれる。幼名少助。慶長二年(一五九七)、慶長の役で初陣を果たす。その後喧嘩沙汰を起こし長政の怒りをかい、父次貞から勘当される。慶長五年(一六〇〇)、故郷の姫路に帰っていたが、長政が家康方に属して戦うことを聞き、関ヶ原の長政の陣に加わり、その戦功著しいものであったため、帰参を許された。普請の才能があり、江戸・大坂城の天下普請のおりは黒田家の普請役差配を長政・忠之から任せられた。島原の乱にも参戦し、慶安二年(一六四九)三月十日病で没する。享年七十一歳(註?前掲書五九六・五九七頁)。

48 安藤帯刀直次は関ヶ原合戦に参加しているが、帯刀を名乗るのは慶長十年(一六〇五)正月十日のことである(寛政譜 第十七「一六九一七二頁」)。

49 成瀬隼人正成は関ヶ原合戦に参加しているが、隼人正を名乗るのは慶長十二年(一六〇七)閏四月のことである(寛政譜 第十五「一三三三〜一三五頁」)。

50 石田三成捕縛については「関原始末記」などから田中吉政の家臣田中伝左衛門に捕えられたとされる(旧参謀本部編纂「関ヶ原の役」(二〇〇九年、徳間書店)三八二・三八三頁)。

51 小西行長捕縛については次のような伝承があるようである。「関ヶ原合戦で破れ伊吹山中に逃げ込み、川合という集落にたどり着いた行長を地元の源太夫という人が見つけ、匿おうとしてさらに奥の中山へ行長を連れて行った。中山の人々は行長を守ろうと、観音寺の須弥壇の中に匿った。しかし、村の要之助が奥地の押又へ炭焼きに行った際、同じく炭焼きに来ていた不破郡新井の林蔵という人物から、家康から行長ら西軍の武將に対して厳しい探索命令が出ていることを聞いた。要之助は、行長を匿っていることが知れたら中山が厳しいお咎めを受けると考え、その場で林蔵と相談し、すぐに地元の領主・竹中重門へ報告。結局、竹中の家来により行長は捕らえられてしまった。

(…後略…)〔春日村の文化財より〕〔平成十九年度秋季特別展覧会 八代の歴史と文化―七小西行長〕(二〇〇七年、八代市立博物館未来の森ミュージアム)四四頁)。

52 石田三成の父は通称を藤左衛門あるいは佐吾右衛門といい、三成が豊臣秀吉に召出されて以後、正継と称し、三成の立身につれて従五位下隱岐守に任ぜられているが、それ以前の経歴は詳らかでない(今井林太郎「石田三成」(一九六一年、吉川弘文館)二頁)。正継が将監を名乗ったというところは管見の限り見出せない。

53 鹿ヶ谷は現在の京都府左京区鹿ヶ谷(日本歴史地名大系二七 京都市の地名)(一九七九年、平凡社)一四八・一四九頁)。

54 結城秀康は慶長二年(一五九七)九月二十八日参議に任官され、慶長十年(一六〇五)七月二十六日には権中納言に任ぜられるが、翌十一年一月十日に辞退している。(新訂増補 國史大系第五十五巻 公卿補任 第三篇)(一九三六年、國史大系刊行會)五一・五二四・五二五頁)。つまり、秀康が如水のもとを訪ねていた時はまだ中納言に任官されておらず、「三河守」と呼ばれていたようである。ちなみに、秀康は天正十三年(一五八五)七月十一日、従四位下侍従兼三河守に叙任官され、同十六年四月、左近衛権中將に任官されている(齋木一馬・岩沢愿彦・戸原純一校訂「徳川諸家系譜 第四」(一九八四年、統群書類従完成会)九頁)。

55 松岡博和氏によると、「秀吉の側近として、天下統一に貢献した如水の生活は、豪勢を極めたであろうに、説くところの茶の湯の心得は極めて素朴であり、華美・豪奢な趣は全くない。自らも利休流と強調するとおり、わび・さびに象徴される利休の茶の湯を体得した茶人ではなかったかと思う。」(松岡博和「黒田如水と茶の湯」「醒ヶ井屋敷における茶会」の謎について)(福岡地方史研究「第三九号、二〇〇一年、福岡地方史研究会)一四頁)、とされる。如水の文化人としての側面はこれまであまり強調されてこなかったが、この史料ではそういった面にもスポットライトをあてて、しかも歴史的事実である点から、これを如水の「伝記」と位置付けることができると考える。

56 黒崎城は、洞海湾に突き出た標高六三(比高三〇)メートルの道伯山上に位置し、黒田氏の新城で、主郭を中心とする四つの曲輪からなる(福岡県史 通史編福岡藩(一)一九九八年、福岡県。一九二頁)。

57 井上周防は幼名弥太郎、後に九郎右衛門と改め、黒田氏筑前入国の後周防と号し、隠居し剃髪して道伯と号す。天文二十三年(一五五四)播磨国姫路に生まれる。長ずるに及んで、黒田家に仕官し、孝高(如水)の父美濃守職隆に仕える。慶長五年(一六〇〇)如水に従ひて豊後に出陣し、大友義統の先手吉弘嘉兵衛尉統幸と鎗を合せて打ち勝ち、その名を挙げた。翌年如水に従って伏見に赴き、家康・秀忠に拝謁。秀忠は石垣原での戦功を賞し、鹿毛の馬を与えた。之房には男女あわせて十一人の子がいたという。寛永十一年(一六三四)十月二十二日病死。享年八十一歳(九州大学附属図書館中央図書館所蔵「増益御家臣傳」(六八〇/ソ/二))。

58 野村大學は野村市右衛門祐直のこと。天正九(一五八一)年播磨国姫路に生まれる。父は野村太郎兵衛祐勝。大学、隼人と称する。慶長の役に十七歳で出陣、数々の武功を立てる。筑前入国後知行六千石を領す。寛永八(一六三一)年八月四日、嘉麻郡鯉田村にて没す。享年五十一歳(註?前掲書五六八・五六九頁)。

59 高祖城は、前原市と福岡市と境を接する高祖山(標高四一六メートル)の頂上部に所在する。城の縄張りとしては、「上ノ城」・「下ノ城」を中心に郭群を形成している。高祖城の創建時期については、建長元年(一二四九)、原田種次が廢城となった怡土城の一部を利用して高祖城を築いたとも伝えられるが、それを裏付ける文献史料に乏しい。天正十四年(一五八六)、豊臣秀吉の九州平定において原田信種は降伏、高祖城はその後すぐ破城された(『新修 志摩町史 上巻』二〇〇九年、志摩町)三九六・三九七頁)。

60 遠賀郡とあるが、黒崎城があった時期、すなわち慶長・元和期は御牧郡が用いられていた。寛文四年(一六六四)に御牧郡から遠賀郡に改められたという(註18前掲書八七頁)。

61 三宅若狭は初名藤十郎。実名は家義。後に三太夫と改め、晩年は若狭と号す。慶長五年(一六〇〇)石垣原合戦に従軍し戦功をあげた。その褒美として如水から清光の刀を与えられた。筑前入国後三千六百石を与えられ若松城に置かれた。さらに若松周辺一万石の地を預けられ、代官・船手頭を勤めた。元和八年(一六二二)十月六日、病で若松において没す。享年七十二歳(註2前掲書五九三〜五九五頁)。

62 黒崎城・「摩手之城」(麻氏良城)・「小石原之城」(松尾城)・「大隈城」(益富城)・鷹取城・若松城はいわゆる筑前六端城である(註18前掲書八二頁)。

63 村田眞理氏によると、「息子長政に家督を譲り、福岡城築城中の一時期、(太宰府：筆者注)天満宮の傍らに隠棲していた黒田如水は、その晩年連歌に傾倒し、『常に社司神人をまねき歌を詠し連歌をもてあそびたまいけるとなん 仰連歌屋(連歌屋は代々、連歌をもつて天満宮に仕えていた坊・社家)を神席の傍らに建給ひ(中略)紹印を初住の主とし給う』(『太宰府天満宮連歌屋記事』)として連歌屋を再興し、神事の中核となしたのです。」(村田眞理「連歌屋初住・木山紹印」(『飛梅』第一四四号、二〇〇七年、太宰府天満宮社務所)七頁)。

64 横嶽(横岳)崇福寺は、文永九年(一二七二)に大応国師南浦紹明が入山して以来、その法を嗣いだ名僧を輩出し、大応派の中心的寺院の一つとして興隆した。しかし、天正十四年(一五八六)の薩摩島津氏の軍勢が御笠郡の岩屋城に高橋紹運を攻めた際、横岳の地にあった崇福寺は兵火によって、その多くを焼失した。その後、慶長年間に黒田長政によって現福岡市東区千代の地に黒田家の菩提寺として再建されている(『福岡市文化財調査目録四 崇福寺収蔵品目録』(一九九〇年、福岡市教育委員会)一頁、『太宰府市の文化財第四五集 横岳遺跡一横嶽崇福寺跡の調査一(遺構編)』(一九九九年、太宰府市教育委員会)序)。

65 この史料においては如水と長政の没年が混同されている。如水は慶長九年(一六〇四)三月二十日、伏見において没し、長政は元和九年(一六二二)八月四日、京都報恩寺において没している(『寛政譜 第七』二〇四・二〇八頁)。

※史料中の人名比定には『新訂 寛政重修諸家譜』一〜二二(一九六四〜一九六七年、続群書類従完成会)を用いた。

謝辞

本稿執筆にあたっては、八幡郷土史会事務局長児玉義信先生、九州大学比較社会文化研究院高野信治先生にご教示を賜りました。さらに、大学院の先輩である田中由利子氏、同輩の金羽彬氏には多くのご厚意を賜りました。ここに深く御礼申し上げます。

“The Records of War in Ishigakibaru: Materials on the Biography and the Records of the ‘Ishigakibaru’ and the ‘Sekigahara’ Battles in Kyushu” (Volume II)

Takashi MORITOMO

In this article, the biography and the war's records of KURODA Josui are analyzed. KURODA Josui is a person who won the battle in Ishigakibaru (now Beppu city, in Oita prefecture) and participated in the battles that took place in Kyushu. On behalf of TOKUGAWA Ieyasu, KURODA Nagamasa, the son of Josui, joined the Eastern army and fought desperately against the Western army from ISHIDA Mitsunari downward in the Sekigahara. The KURODA family became the feudal lord of Chikuzen. For further information on this war in Ishigakibaru, please refer to the volume I of this article.

“The Records of War in Ishigakibaru,” which is introduced in this article, depicts numerous remarkable anecdotes. It illustrates Josui's ambition to conquer the whole country. Also Josui was highly praised by TOYOTOMI Hideyoshi.

The record was written to praise the achievements of the KURODA family. The achievements were that father (Josui) and his son (Nagamasa) participated in the important battle such as the Sekigahara Battle, and including the war in Ishigakibaru in September, 1600 (Keicho 5). The KURODA family became the feudal lord of Chikuzen with 520,000 revenues in koku. However, the historical materials foreshadow that the war in September, 1600 (Keicho 5), which allowed the TOKUGAWA to conquer the country, could also have been an opportunity for the KURODA family to conquer the country instead of the TOKUGAWA family. Thus, comparing the various biographies and the war's records give different perspectives on history.

The historical materials may conduct as an appropriate tool for studying literature and ideologies not that of history. But there are descriptions that we rarely encounter in studying history. Therefore studying biographies and war's records might have great possibilities to understand history.